
風の名のもとに・M

三神ざき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風の名のもとに・M

【Nコード】

N8282F

【作者名】

三神ざき

【あらすじ】

「風の名のもとに」の続編。魔法が使えないはずの元シスター現ウェイトレスの楓は誤って魔界の住人を召喚してしまう。記憶を失ってしまったその魔界の住人ふつくんの記憶と取り戻すため、自分が何者なのかを知るため、楓とふつくんは護、霞と共に魔界の入り口のあるプランへと旅をすることになったのだった。（詳しくは、風の名のもとに、を見てください）

連載再開！（前書き）

位置づけ的には「風の名のもとに」の第三章的なものです。今までのストーリーを知っていてくださっているものと思って書いていくので、知らない方はよろしかったら「風の名のもとに」の方もご覧ください。

連載再開！

「レナスう、ちよつとその鍋に塩入れておいてもらっていい？」

「良いですよ。どれくらい入れますか？」

「うん？美味しくなると思う程度に」

「はい」

「あ、あの、護」

「あ、霞。もうちよつと待っててね。もう少しで昼食出来るから。」

あつ、レナス。ちよつとこれ味見してみてくれない？」

「はいはい」

のどかに流れる雲、空は何処までも青く、風は穏やかに木々の間を抜け木の葉を揺らす。自分たちの生きているこの世界、この星も自分たちと同じく生きているのだと感じさせてくれる。時には優しく包み込み生命を育み、時には猛威を振るい牙を向け命を喰らう。廻る死と生。人も動物も植物も皆その理からは逃れられないけれど、だからこそ生きている事に生まれてくることに意味がある。

そんな生そのものたる自然に囲まれた中、護達パーティは、街道沿いに設けられているキャンプ場で少し遅めの昼食を取ろうとしていた。

「私も何か手伝うよ」

「いいって。霞はふっくと楓といっしょに休んで。レナスが手伝ってくれてるし本当もう直ぐ出来るから」

「でも・・・」

「護さん、こつちできましたよ」

「おー、ありがとう。こつちもあとちよつと煮込めば完成するよ。」

やっぱり料理できる人が増えると効率よくて助かるわ」

「いえいええ。これくらい料理だったら誰だって出来ますよ」

「いや、レナスは料理上手だと思うよ？昔より腕上げたんじゃない？」

「そうですかあ？」

のんびりまったり護とレナスは昼食を作りつつ和気藹々と話している。霞はその輪の中に入ることが出来ず、懽然とした態度で楓とふっくんの元に戻っていった。

「どうしたんですか、お姉さま？なんか機嫌悪いみたいですけど？」
「別に。なんでもない」

平然と楓の横に座った霞だったが、なんでもないと言いながらもその言葉には軽い怒気が含まれていた。霞とふっくんはキョトンとしながら顔を見合わせる。こんなにも清々しい自然と陽気に包まれているというのに、霞の周りだけ空気がやたら重く痛い。

「お姉さまどうしちゃったのかね？」

「さあでしゅ。なんか最近の霞しゃん、怖い感じがしゅるでしゅよ」
楓とふっくんはこそこそと霞に聞こえないように話をしていた。

負のオーラを発しまくっている当の霞は、ただ護とレナスの方をジーツと見つめている。

リリムのモンスター襲撃事件が片付き、町もようやく安寧を得、すぐさま町の復興が行われた。モンスターを退治した護達は急ぐ旅でもなかったのでその復興に手を貸していた。復興に手を貸したいと言い出したのは護で、霞も以前のラゼルの状態とリリムをダブらせその申し出には断らなかつたし、楓はお姉さまが良いのならと反対もせず、ふっくんは頑張るでしゅとむしろやる気満々だった。

ただ、霞には一つ気になっていた事があつた。それは護の手伝いたいと言った理由の一つ、レナスの事である。護は、どうしてもレナスともう少し話がしたいし放っておけないと言つたのだ。昔の仲間に久しぶりに出会つたのだから積もる話もあるのだらうと、そのときはなんとか割り切つてはいたものの、その後は予想外の出来事が起こってしまう。

復興に目処が立ちモンスターを退治した賞金も貰つて旅費問題が解決したので、いざ旅を再開しよう、レナスさんサヨウナラ〜という時にレナスから思わぬ申し出があつた。

「護さん。よかつたら私も一緒に旅に付いて行っても良いですか？」

「え？いいけど？」

「よかつたですう」

この護のあつさりとした返事によりパーティにレナスが加わった。それからというものやたら護はレナスを頼り仲も良く、反対に護はあまり霞と話をしなくなった。

そして今に至る。

「は〜い、お待たせさん」

「わあ〜！良い匂い！この匂いだけでご飯食べれそう」

「おいしそうでしゅね」

「今日はレナスが作った故郷に伝わる風土料理がメインだよ」

「レナスさんの料理は美味しいから私好きです。ね！お姉さま？」

「え？・・・ええ」

「お口に合うとよろしいんですけど〜」

「大丈夫だって。レナスの料理は本当美味しいから。僕が保障するよ」

「ありがとうございます。護さん」

「いっただきま〜す！」

そうして心地よい快晴の下、賑やかに食事が始まった。一人を除いて。

「う〜ん。おついしいー！お姉さま、これ凄く美味しいですよ。食べてみてください」

「・・・」

「護さん、はい、これどうぞ。護さん食べるの遅いから確保しておかないとなくなっちゃいますからねえ」

「うん。ありがとう、レナス」

「いえいえ〜」

「・・・」

「あらあ？霞さん。あまりお箸が進んでないみたいですけどお。お口に合いませんでしたかあ？」

「ん？食べないの、霞？」

「・・・食べてるわよ・・・」

ボソッ

「あ、レナス。これ凄く美味しい。この辛さがなんとも」

「護さん、辛いのが好きでしたから少しスパイスを多めに使ったんです」

「うん！グッジョブ！」

「・・・」

皆食事にはかなり満足したようだが、やはり霞は終始無言で箸もそんなに進んでいない。ずっと何か機嫌が悪い雰囲気をかもし出している。

「ねえ。霞」

「な、何？」

突然護に声を掛けられて、一瞬目を輝かせて霞は瞬時に聞き返す。

「そのテリーチ、食べないなら貰って良い？」

護が言っているのは、先ほど美味しいと言っていたスパイスの効いたレナスの作った料理だ。

「・・・食べたいなら勝手に食べれば！」

「え？え？どうしたの霞？」

霞の怒気を含んだ声に思わず護は身体をビクつかせる。

「なんでもない！」

霞は皿を護に突き出し無理やり渡すと、立ち上がって林の方に歩いて行ってしまった。

「・・・。ねえ、霞どうかしたの？」

「さあ。お姉さまなんか今日はご機嫌斜めみたいなんです」

「今日だけじゃなくて、最近ずっと怖いでしゅよ、お兄ちゃん」

「そうなの？」

「はいでしゅ」

「全然気がつかなかったけど、何かあったのかな？」

以前と違う霞の態度を不思議に思いながら、護はテリーチを頼張

っていた。

食事を終え、しばし食後の休憩をした後、パーティーは再び街道を北へと足を運ぶ。食事の途中何処かに行ってしまった霞も程なく戻ってきて、何事も無かったかのように旅路を共に歩んではいたが一番後ろで何か俯きながら付いて来ている。

先頭でレナスと一緒に歩いていた護だったが、先ほどの霞の態度とふっくんの最近変だという発言が気にかかり、時折チラリチラリと霞の方に目をやっていた。

やっぱり、なにかあったか？

ずっと俯いている霞を見て、さすがに心配になった護は霞の元に歩み寄ろうとした。そのとき、レナスから声が掛けられる。

「護さん。ずっと小さいままなんですねぇ」

「え？うん。駄目？」

「いゝえゝ、可愛らしくて良いと思いますよぉ」

「あ、そう？」

可愛いと言われ、つつい照れ笑いをしてしまったときにたまたま霞と目が合った。しかし、霞は直ぐにフンツ！と顔を背けた。

「？」

「ねえ、護さん」

「ん？何、楓？」

「ロージーまであとどれくらいなんですか？」

「んゝ、そうだね。あと二日、三日くらいじゃないかな？今日中に次の町、テリシャには着けると思うんだ。で、テリシャからロージーまでは半日くらいで着くから、テリシャでの滞在を考えるとそんなものくらいじゃないかなと」

「半日で着くなら、滞在しないで直ぐに向かった方がいいんじゃないですか？」

「そうしたいのは山々なんだけど・・・」

「何かあるんですか？」

「ま、ちよっとね」

「？」

護が思わせぶりな態度をしたので、楓は凄く気になったが、あえて言わないような事ならむしろ知らない方がその何かに直面した時に驚きがまして良いだろうと思いき深く追求しない事にした。もし、何か急迫する問題ごとなら前もって護は言ってくれるだろうと思っていたところもある。

その後も特に何も問題なく旅は進み、夕暮れ時にはテリシャの町に着く事ができた。

連載再開！（後書き）

あけましておめでとうございます。新年を迎えるに当たって「風の名のもとに」の続編を書くことに決めました。

一年前、もろもろの諸事情によりもう二度と書くことは無いだろうと思っていたのですが、非情に中途半端に連載を中止した事と、ありがたいことにまた書いてくださいという応援メッセージをいただいたことに励まされ、字書きとして初心に戻ろうと思いついて連載を再開いたしました。

世界観をそのままに、以前とは違った雰囲気を書いていこうかと思いますので、よろしくお願いいたします。

荒れる霞

東大陸の北入り口に当たる港町ロージーに程近い町、テリシャ。

港から近いという立地から大陸有数の交易町としてさまざまな人種、品物が集まる。中には半獣人や妖精といったモンスターに近い人種も見受けられ、東大陸では珍しい光景が町を賑わしていた。比較的自由な自治を取っているため、一部治安の悪い部分も見受けられるが、喧嘩、決闘といったものもここに居る人たちにとってはむしろお祭りのようなものだった。

「賑やかな町ですね！ふつくん、またはぐれないようにしないとね」

「はいでしゅ」

「さてさて、とりあえず宿屋に向かおうか」

「はい」

皆はぐれないように固まりつつ町の中心部に程近い宿屋へと向かった。

護が代表して宿屋の主人に話を掛ける。

「こんばんわ」

「いらっしやい」

「四人なんですけど、部屋空いてます？」

「いや、悪いね。生憎と今はどの部屋も一杯なんだ」

「あー、そうなんですか。じゃあ、他の宿探すか」

「ガキンちよ、申し訳ないけどたぶん今は何処の宿屋に行っても空いて無いと思うぜ」

「何故です？」

「なにやら今、オルビスで問題が起こってるらしくてな。オルビス経由のルートが全線通行できなくなってるんだよ。それで結構、待たされてる奴らが宿屋を占拠してるからさ」

「それは困った」

「まあ、中には近くでキャンプしてる奴らもいるくらいだし、ガキ

んちよも旅人ならキャンプ道具ぐらいもってるんだろっ?」

「ええ」

「それでなんとかするこつたあな」

「はあ」

そんなこんなで護達は宿屋を追い出されてしまった。宿屋の前で作戦会議が行われる。

「どうする?」

「私はあ、キャンプでも良いですよあ」

「えー!私ゆっくりベッドで寝たいなあ。キャンプじゃ疲れ取れないんだもん」

「僕はどっちでも良いでしゅよ?」

「・・・」

「皆、キャンプでも良いって言ってるしキャンプにするか」

「ちよつと、護さん!私は嫌ですって言ってるでしょ!」

「楓。こういうときは多数決じゃん」

「えーえー、やだー!ベッドで温かい布団に包まって寝たいい!多数決はんたいい!」

「やれやれ、困ったね。どうしたものか・・・。霞から楓に言っやってよ。霞はキャンプでも良いんでしょ?」

「・・・」

駄々をこねる楓を何とかしようと霞に助け舟を求めた。楓は自分の話はあまり聞かないけど霞の言う事なら絶対的に話を聞くからだ。彼女の場合、霞が私のために死んでと言ったも喜んで死ぬような気がする。

しかし、護の問いに対して霞は何も答えなかった。ただ、仲睦まじく歩いている町行く人々を見つめている。

「霞?」

「・・・」

「かすみさくん?」

「・・・」

「おーい。かすミンミン？」

「……………」

声をかけどもかけども霞はまったくこちらの声が届いていない様子である。霞の視線はひたすら町の人たちに向けられている。最初、何かこの町に不穏な危険な事でもあるのかとも思い霞の視線の先を一緒に追ってみたが、そこには特に変わったものは無く、人が歩いているだけである。その人たちを見つめる霞の瞳はどこか悲しげだった。

「どうしちゃったの霞は？」

「さあ？」

共に霞を見ていた楓も不思議そうに首をかしげた。

トントン……

「え？あ？何？」

肩を叩かれようやく霞はこちらを振り向く。

「どうかした？」

「べ、別に」

「そう？あのさ、宿が見つからなくてキャンプにしようかっていう話が出るんだけど、霞はキャンプでも良いよね？」

「お姉さま！お疲れですよね！キャンプなんて嫌ですよね！？」

「……レナスとふつくんは何て言ってるの？」

「うん？ふつくんはどちらでもいいって。レナスはキャンプで良いって言うってくれてるよ」

「護もキャンプで良いの？」

「ああ、レナスも良いって言うってくれてるし、宿が見つからない以上仕方ないかと」

「私は絶対嫌だって言ってるんですけど！」

「だーから、嫌だって言っても宿がない以上しょうがないでしょ？レナスだってふつくんだって疲れてるけど良いって言うてくれるんだから、我慢してよ」

「えーえー」

霞はしばらく護と楓の口論を見ていたが、ゆっくりとした口調で口を開いた。

「私は・・・疲れてるから・・・宿屋が良い」

「え!？」

「ほらあ!」

この霞の意見には護は驚いた。普段、そんなわがままを言うこともなくなるべく皆との協調性を重視するはずの霞が、楓を嗜むどころか肩を持つなんて。

え?え?霞、そんなに疲れてたのか?最近なんか調子が変わりいし、なんか無理とかさせてたのかな

「あ、そ、そう?そうだよ。ずっと野宿だったもんね。そりゃ疲れてるか。レナスもふつくくんもやっぱり無理してるんだろうし」

「僕は大丈夫でしょよ?」

「私もです」

「いや、うん。これから大変になるだろうし今のうちに休んどいた方がいいから、そうだね、やっぱりちゃんと休める宿屋探した方がいいよね。えっと、あー」

護は予想外の霞の発言とテンションに、気を使わないといけないような気がして少し戸惑ったためなんと行って良いのかうまく頭が働かない。

「あー、うん!僕一応他の宿探してくるよ」

「あ、私もいきます」

「良いよレナス。皆も疲れてるんだから、その酒場ででも休んで。それじゃ」

護は言うが早いか踵を返し町中に走っていった。

「あちゃ、僕全然気を使わなくなってるじゃん。仲間だからって甘えてた所があるのか。駄目だなあ。しっかりしろ、護」

護は走りながらぶつぶつと自分を責めた。確かに今の自分はよくない。どんなに親しくとも気を使うことを忘れず、それぞれの事を考えて決して自分勝手に行動してはいけない。

楓もふつくんもただでさえ自分の事がわからず、見せることは無いけどそれだけで不安を感じているはずだし、霞だっていつも周りに迷惑をかけまいと僕たちに合わせてくれている。レナスも自己犠牲が強いし、皆何かしら今回の旅には負担を抱えているんだ。魔界に行こうとしているならメンタルが大事とあれだけ自分から言っていたのに、それを支えるためにきてるのに最近の自分はただ旅の事だけを考えて、パーティの事を考えていなかったのかも知れない。これじゃあ本末転倒だ。

「あ、そうですね。なんとか三人だけでも駄目ですか？・・・そこをなんとか」

いくつかの宿を回り、なんとか霞とレナス、楓の三人の部屋だけでも取れないかと頼み込んでいく。しかし、どこも満室で空きはひとつもない。

「まいったな・・・。後、残ってるのはあそこだけだけど。この調子じゃ駄目かも。とにかく行ってみよう」

そうして護は最後の宿屋に足を運んだ。

時は遡り、護と別れた霞、レナス、楓、ふつくんの四人(?)は言われたとおり最初の宿屋の横にある酒場に入って休む事にした。酒場の中は活気良く人ごみで溢れている。ちょうど奥のテーブルが空いていたので、四人はぐてーっと座り込んだ。

「あー、本当疲れたよ。直ぐにベッドに横になりたい」
テーブルに顔を突っ伏し楓は愚痴をこぼす。

「そうですねえ。やっぱり旅は疲れますよねえ」

「その割りにレナスさん、あまり疲れてる感じはしないんですけど」
「そんなことないですよあ？ただ、戦場や難民キャンプでは疲労感を出したら負けなところがあつたので、それに慣れちゃってるだけですよあ。本当は凄く疲れてます」

疲れを感じさせないような穏やかな表情を浮かべながらレナスは笑った。

「そっかあ。お姉さまもお疲れですよねえ」

「ええ。まあ」

霞は相変わらずどこか雰囲気が暗い。楓はそれが疲れのせいだと受け取ったようでさらに愚痴を続ける。

「大体、護さん。自分のペースで動きすぎるんですよ。自分が旅慣れしてるからって。もう少し、か弱い女の子と共に旅してるってこと気にして欲しいですよね」

「あらあ？でも、護さん。かなり皆さんにペースを合わせてらっしゃいますし、出来る限りの気遣いをしてくれると思いましたがどお？おかげで私は一人で旅していたときより比較的楽でしたよお」

「えー、あれで？」

「ええ」

「あー、私には解りません。お姉さまもそんな風には感じませんでしたよね？」

「・・・うーん」

「さすがにレナスさんは護さんと昔荒波にもまれた仲間なんですね。そういうのが解るなんて」

「解るって言うかあ。昔の護さんは人を気遣うとか人にペースを合わせるとかそういう人ではまったく無かったですからねえ。唯我独尊と言うんでしょうかあ。だから、今と昔で違うなあって思うだけですよあ」

「そっかあ。まあ、なにせよお腹も空きましたし食事頼みましようよ！」

「え、でも、護さん待つてた方が良いんじゃないですかあ？先に食事済ましてしまっなんて」

「良いじゃないですかレナスさん。護さん待つてたら何時ご飯にありつけるかわからないんだもん。私お腹空きましたよ。食べちゃいましようよ。あ、すみませーん！」

おろおろとしているレナスを気にもせず、楓は勝手に注文を取り付けた。霞は黙っていたし、ふつくんものんびりと尻尾を振っている。食事が運ばれてくる間、楓は珍しく霞とではなくレナスと話を

始めた。楓なりに霞は疲れてるからそつとして置いてあげようと気を使ったのだ。

「はいよ！おまちどうさん！」

テーブルの上に大皿に乗ったスパゲティのようなものとシラフという魚の包み焼き、テルーの手羽先とサラダが運ばれてきた。

「わー。美味しそう！さあ、冷めないうちに食べちゃいませよー！」

楓は直ぐに料理に手を伸ばした。ふつくんにも取ってあげてふつくんも美味しそうに食べ始める。レナスは護に悪いとは思ってたが、空腹に勝てなかったことと、なにより頼んだ以上残してしまつては犠牲になつた動植物様に申し訳ないと思い食べる事にしたようだった。

「あれ？お姉さま食べないんですか？」

「ええ。実は私そんなにお腹空いてないの」

「えー？大丈夫ですか？食べないと健康とお肌によろしくありませんよ？」

「良いの。気にしないで私の分も食べていいわ。私、ちょっと飲み物でも飲んでるからカウンターの方に行つてる」

「あ、はい」

そう言つと、霞は立ち上がりカウンター席の方に向かつて行く。

たつた一つ空いていたカウンター席に腰を下ろし、目の前の店員に声を掛ける。

「ジンギスをくれない？ストレートで」

「ストレートですか？お客さん、かなり酒が強いんですね。ジンギスをストレートで頼む人なんてここでも滅多に居ませんよ」

「良いから頂戴」

「かしこまりました」

霞の目の前にほんのり淡く青みがかった液体が注がれたアワーグラスが置かれる。ジンギスはラゼル発祥のお酒で、ラゼル近郊に育つジリタリスという植物を発酵させて作られている。わりとポピュラーに飲まれているお酒ではあるのだが、いかなせん度数がかなり

高く、なにかと混ぜ合わせたり割ったりして飲むのが通常である。

少しグラスを見つめた霞はゆっくりとグラスに手を伸ばすと、何かを吹っ切るかのように一気にジンギスを飲み干した。

「ふ〜。もう一杯いただける?」

「え!?! お客さん、あれをもう飲んだんですか? 大丈夫なんですか?」

「いいからもう一杯持ってきて」

「は、はあ」

霞の雰囲気気圧され、おどおどとした店員から貰ったジンギスをまた一気に飲み干す。そして、またもう一杯と頼みまた直ぐに飲み干した。あっけに取られている店員を気にもせず再び注文をする。いつのまにかその飲みっぷりを見て、霞の周りには人が集まっていた。

「おー、ねえちゃん。良い飲みっぷりだねえ!」

「あつははは。いいねえいいねえ。やっぱり酒はこうやって飲むものだよな」

集まった連中もわいのわいのと酒を片手に一緒になって飲んだくれ始めた。霞はそれすらも気にせず、同じペースのままどんどんジンギスを飲み干していく。

そんな折、厳つい体つきをしたおっさんがべろんべろんに酔っ払いながら霞の傍に寄って来た。

「おー、どうしたどうしたあ。えらく綺麗なねえちゃんが飲んだくれてるじゃねえか。ははは、俺も混ぜてくれよお。一緒に飲もうぜえ」

そのおっさんは霞の横に割って入ると霞の肩に手を回し顔を近づける。

「こりゃこりゃ、見れば見るほどべっぴんさんだあ。いいねえ。俺と一緒に飲んで良いことしようぜえ」

「・・・触るな・・・」

「あぁ?」

「私に気安く触るなど言っただんだ」

霞は肩に置かれた男の手をバシツと払いのける。

「おお？なんだつねねえな。お高くとまったって良いことねえぜ？こんな所で飲んでるんだ。なあ、本当はあんただって男を求めてるんだろ？俺と良いことしようじゃないか。嫌な事なんて俺が身体で忘れさせてやんよ」

「・・・」

「へっへっへ」

男はいやらしい目つきで霞の身体を嘗め回すかのように見る。

「私に触るなどいつただろう！」

男が再び霞の腰に手を回した瞬間、怒声と共に霞がその男を殴り飛ばした。周りに歓声と笑い声が響く。

「ついで！やりやがったな！」

「先にちよつかいを出したのはおまえだ」

「生意気な小娘が！おらあ女だからって容赦しないぞ！調教してひん剥いてヒーヒー言わしたらあ！」

「上等だ。この下衆め」

そして霞と酔っ払いの男を中心にそのまま喧嘩が始まった。周りに居た客たちはこぞって「いいぞー！やれやれー！」「どつちが勝つか賭けるぞ！」と煽り、それに便乗して殴り合いを始める輩も居る。

「あれ？なんかカウンターの方に人だかりが出来てますよ？」

「そうですねえ、なんか余計騒がしくなりましたみたいですよ」

「何かあったんでしゅかね？」

「なんだろうね。何があったのか人でよく見えないや」

突然騒がしくなった店の中にいたレナスと楓、ふつくんは何が起こったのか把握できず、遠目からその騒動を見ていた。

荒れる霞（後書き）

あとがきですみよ〜ん。

正月で親戚に無理やり苦手なお酒を進められて気分の悪い作者です。久しぶりに書いてるせい、酒で気分が悪いせいかわかりませんが、いまいちテンポがつかめず、どうも微妙な風味になってしまいましたね（汗）

描写、展開というのは難しいです。行き当たりばったりではよろしくないと言っ事ですよ。

宿確保の裏には？

「ちょ！何やってるのさ！！」

宿屋探しから帰ってきた護が酒場の入り口を開けた瞬間、目に飛び込んできたのは酒瓶片手に殴りあたり笑いあつたりして馬鹿騒ぎしてる男共の群れだった。しかし、そんなことに動じて声を発したわけではない。この町でこういったことは日常茶判事だと知っていたからだ。

その群集を避けて中に入ろうとした護は、人ごみの間からちらりとこの騒ぎの中心にいる人物が見えた。その人物は、酒が掛かって濡れてしまったのか体のいたるところがビショビショで髪も乱れていたが、そんなことにもお構いなく、なにやら敵つい男をひつつかみポツポツと殴りかかっていた。

それを見たときは、悪夢でも見たかのように顔色が真っ青になった。その人物が自分のよく知る相手であつたために声を上げざるおえなかつたのだ。

「ストップストップ！なんで喧嘩なんかしてるの！」

護はなんとか人ごみを掻き分け喧嘩している二人に割つてはいるが、殴つている方は一向に喧嘩を止めようとしなない。

「ねえ！！聞いているの！！」

ドカツ！ガスツ！！

「これ以上やったら相手死んじゃうから！ちょっ、本当にやめ・・！」

ガスガスガスツ！

「だから、止めろって！霞！！」

まったく止めようとしなない霞の名を叫び無理やり男からひっぺがしにかかった。

「うるさい！離してえ！！」

バキツ！！！！ドシャー！！

「イツテエ・・・」

霞の猛烈な右ストレートが護の顔面、もろ人中にヒットし、護はその勢いで後ろに吹っ飛び床に叩きつけられる。周りのギャラリーからは、ワーッと歓声が上がった。

そのまま霞は荒い息遣いをしながら、尻餅をついてこちらを見ている護の顔を見た。護の鼻からは赤い液体が滴っている。喧嘩の相手の方はようやく霞の手から逃れられ、そのままドサツと倒れこんだ。

「ハアハアハア・・・」

「・・・」

護もまた無言で霞を見つめ返す。

「ま、護の・・・バカー！！！！」

「・・・は？え？僕？？？」

霞の突然の馬鹿発言に護は意味も分からず、目を見開いて辺りをキョロキョロと見る。霞はさらに大声で護に向かって言葉を発した。「あんた何様のつもりよ！勝手に仲間にいれるわ、気にもしないわ、目の前でこれみよがしにデレデレするわ！！」

「え？え？」

「今までのことは！？・・・私って、私っだってえ！」

「あの、霞。何を言ってる・・・？」

「すみませーん。通してくださいーい」

「霞おねえさんと、お兄さんは何をしてるでしゅか？」

「あらあらあ、騒がしいと思ったら霞さんだっただんですねえ。あ、護さん。血が・・・」

護の叫び声に気が付いたのか霞の大声に気が付いたのか、店の奥のテーブルで食事を取りつつ傍観者になっていた楓たちが輪の中に入ってきた。

「どうしたんですか、お姉さま！そんな濡れちゃって！あゝ、綺麗なお顔に汚れが」

心配そうに楓は霞の傍に駆け寄った。レナスとぶつくくんは護の傍

に向かう。

「護さん！いつの間に戻ってきたのかは知らないですけど、お姉さまに変な事したなら許しませんよ！」

「いや！ぼ、僕は何も・・・」

「お姉さま、このおガキ様をやるときはもつと見る影も無いくらいにバキグチャッと顔面を抉り込むかのように殴らないと」

「おい」

「ヒットする瞬間に拳を回転させるのがコツです！」

「楓さん！護さんに対してそんな」

「レナス・・・」

「護さんにはそんなパンチよりもマウントポジションで身動き取れなくしてからフルボッコの方が効果的ですよお」

「いやいや、髪つかんで床に叩きつけた方が」

鬼だ。鬼がいるウー

「お兄しゃん。大丈夫でしゅか？」

唯でさえ霞に意味も分からず殴られ、さらにレナスと楓の話聞いて涙が出そうになった護にふつくくんが唯一慰めの声を掛けた。

「うう、ふつくーん！」

「それで、お姉さま？不埒な輩は全部ぶちのめしたんですよね？」

「・・・」

「まったくお姉さまにこんな乱暴を働こうとするなんて、恐れ多いのよ！少しは分際をわきまえてゴミはゴミらしくそこで地べたを舐めてなさい、この蛆虫！」

楓は倒れていた喧嘩の相手を足蹴に声高らかしながら見下した。

霞はまた黙ったままである。

「あー、お姉さま。こんなにお洋服が汚れてしまって。すぐ着替えないと。風邪を引いたら大変ですし」

「・・・」

「それで、護さん！」

「ひゃいー！」

殴られ扱られ気弱になっている護は、楓の強い姿勢ですらビクついてしまい素っ頓狂な声を上げる。

「宿の方はどうなったんですか！まさか、全部駄目だったとか言わないですよね？」

「は、はい！大丈夫であります！なんとか寢床は確保いたしましたあ！！」

「うむ。よろしい！では、早速案内しなさい。お姉さまを着替えさせないといけないので」

「で、では、直ぐに！こちらです！」

護はすくつと起き上がると低姿勢のままギャラリーたちの群れを避けさせ道を作り、四人を出口へと促した。

「さ、お姉さま行きましょう」

楓に腕を引つ張られ霞は後に付いてく。

「あ、それから護さん」

「な、なんでしょう？」

「こここの御代、よろしくね」

「・・・はい」

護は楓たちの飲食代を払うと宿の方へと案内していった。しばらく歩く。

「ちよつと、護さん。まだ着かないんですか？」

「もうちよつとですから」

やはり低姿勢のままの護。楓は調子に乗ったようで意気揚々としている。霞は楓に腕をとられつつ黙って歩いているし、レナスはふつくんを抱きかかえ「あらあら」と微笑みながらその後ろを付いて来ていた。

「こ、ここです」

ようやく着いた先は、一見普通の民家だった。別に宿屋の看板も何も出ていない。ただし他の民家よりも大きいかなくらいで、あとは何も変哲も無い。

「ここが宿屋なんですか？」

「はい。と、とりあえず中に」
「ふくん」

護が家の扉を開けると、中に眼鏡を掛けたマッスルなおっさんが待ち構えていた。

「おー、来たかボウズ。約束どおり部屋は用意してあるぜ。その階段上がって二階に行ってくれ。部屋は各一人ずつあるから、好きなどころに入って好きなようにくつろいでくれや」

「すみません」

「良いって事よ。俺は約束は守る男だ。あんたらも何か不自由あったら遠慮なく言ってくれや」

「はい」

「そういうわけだから、みんな疲れてるでしょ？霞も着替えなきやならないし、部屋に行こう」

「言われなくても行きますよーだ。あー、やっと暖かい布団で柔らかいベッドで眠れるわー！」

楓は聞くが早いか、霞をつれて二階へと上がって行ってしまった。レナスもふつくんを抱きかかえたままその後を追う。

「あ、ふつくん！」

「なんでしゅか？」

「悪いけどふつくんはレナスか霞と一緒に部屋にしてもらいたいんだけど、良い？」

「良いでしゅよ」

「じゃあ、ふつくんさん。今日は私と寝ましようねえ」

「はいでしゅ」

「ごめんね。レナスも」

「良いですよお。それじゃ、私も先に休ませてもらいますね」

「うん。おやすみ」

レナスは軽く欠伸をすると階段をゆっくりと上っていった。

「じゃあ、よろしくお願ひします」

「おう！任せとけー！」

護は軽くお辞儀をすると宿を出て行った。夜はゆっくりと更けていく。

それからしばし時が過ぎ、二階から降りてきた人影があった。そのまま一階のラウンジらしきところに行くところとゆっくりと椅子に腰掛ける。

「はあ……」

深いため息が漏れる。外は夜だと言うのにまだ人が多く出歩いているようで、ほんの少し声が響く。

「はあ……」

またため息がラウンジを包み込んだ。頭を抱えなにやら考え込む。

「……私……」

「眠れないんですかあ？」

ぼつりと声を漏らしたとき、階段の方から声が聞こえ、ハッ！と顔を上げる。レナスがにこやかな顔をして立っていた。

「あなたこそ寝ないの？」

「寝ようかと思ったんですけど、ちょっとトイレに行きたくなっちゃいましたえ。そしたら、あなたが下に下りていくのが見えたくてすよあ」

「そう」

「どうかしたんですかあ、霞さん。なにやら元気がないようですよあ」

「……別になんでもないわ」

「そうですかあ？それならいいんですけどあ。そういえば、護さん何処いったんでしょあねえ？」

護と聞いて霞の体がびくりと反応した。

「ど、何処って、部屋で寝てるんでしょあ？」

「私もそう思ったんですけどあ。変なんですすよあねえ」

「変？何が？」

「二階の部屋、三つしかないんですよあ。確かあのマッスルなおじさん、各自一部屋ずつ用意してるって言ってましたよあねえ？二階は、

私と霞さんと楓さんで埋まっていますしい、ふつくんさんは私の部屋にいらつしゃいますしい。それでてつきり一階に別の部屋が用意してあると思っただけですけどお、見たところ寝室らしい部屋は一つもありません。護さんの姿もあれから見てないし、変だなあと思っただけですよ」

「え？二階の部屋って三つだけ？」

「はい」

「あなたの部屋に居るとかじゃないわよね？」

「当たり前じゃないですか」

「じゃあ、護は何処で寝てるのよ？」

「だから、何処に行ったのかなあと思っただけですよ」

「?・・・変ね」

「だから、変だってさつきから言ってるじゃないですかあ」

二人が不思議がっているとき、玄関の扉が開いた。二人ともそちらを一齐に見る。護かと思われたが、現れたのはマッスル眼鏡おっさんだった。

「お?どうした嬢ちゃんたち。寝ないのか?あのボウズが言うには相当疲れてるから泊まる場所がどうしても欲しいっていう話だったんだが」

「いえいええ。疲れていますよ。たまたま起きてしまっただけです」

「ふくん。まあ、俺としちゃ約束護ってもらったからどつちでも良い事だが」

「あの、護・・・その子供が何処に行ったかご存知ありませんか?なんか見当たらないんですけど」

「さあ、俺は知らんなあ。あのボウズの面倒まで見てやる約束はしてないからよ」

「約束？」

「ああ。あのボウズ。なんか必死で宿を探しててよ。俺宿屋経営してんだけど、俺んとこ来てどうしても部屋が欲しいって言ってな。」

今状況が状況だけにどの部屋も満室、空く予定は無いって言ったのに、ここが最後なんです！どうしても何とか部屋が欲しいんです！三人泊まれるだけでいいんでなんとかありませんか！？ってしつこくしつこく縋って来るもんだからよ。ガキにそこまで頼まれちゃしようがねえってんで、金次第で何とかしてやるって言ったんだ。俺、優しいだろ？そしたら、あいつ少し悩んだ顔してこの剣を俺に渡したのさ。かなり良い剣だから高く売れるって言ってな。知り合いに鑑定してもらったら確かにこいつは上物だったぜ。で、これをくれるっていう約束で俺の家を使ってくれってことにしたのさ。俺んち無駄に広いから部屋余ってたからよ。剣の額が思った以上に良かったから、貸すだけじゃ悪いと思って俺が世話をしてやることにもしたのわけだ」

「……護が……」

「……その剣、ちよつと見せてもらって良いですかあ？」

「あ？ああ、良いぜ。ただし汚すなよ？」

レナスはおっさんから剣を受け取るとまじまじと見始めた。そして、柄の辺りを見て少し顔を曇らせた。

「ありがとうございます。確かに良い剣ですねえ」

「そうだろ？いやいや、これで部屋貸すだけならお釣りがくるってもんよ」

「……あのあ、一応聞いてみますけどこれって返してもらうこととかって出来ませんよね？」

「あつたりまえだろ？返すんだつたらすぐさま出てってもらうぜ？まあ、あのボウズと世話をちゃんと見るって約束してるからそんなことはしねえけど。でも返すわけには行かないな」

「そうですね。いえ、護さんが良いって言ったなら私は別に返せとかなんていいませんよお。護さんが決めたことですからあ」

「おう！なわけ、おらあもう寝るぜ。あんたらも疲れてるならさつさと寝ちまいな」

おっさんはレナスから剣を返してもらうとそれを持ったまま何処

ぞへと行ってしまった。レナスはしばし呆然と立ち尽くすと、霞の横にストンと座り真剣に何かを考え出した。

「護、私たちのためにそんな約束して用意してくれたんだ」

霞はポーッと虚空を見上げ独り言のように呟いた。

「なんて約束したんですか・・・護さん！」

霞の横で珍しくレナスが強い声を上げる。

「どうかした？レナス」

「どうもこうもない！あの剣は、あの剣だけは絶対手放すわけがないに！なんてことを・・・。私たちのことにそんな気を使わなかった」

「そんなレナス。護にしてみたらこれくらいの気遣い当たり前だと思うよ？仲間を大切にするもの」

「そういう問題じゃないんです！」

「？」

「仲間を大切に思ってくれるのは良いですが・・・でも、あれは・・・あの剣は」

「あの剣がどうかしたの？ただのロングソードじゃない？そんなに高いものだとは思わなかったけど」

「・・・あれは、唯のロングソードじゃないんです。あれは、護さんの大切な、いえ、私にしてみてもとつても大切な人の形見の品なんです・・・」

「え？」

「純さんの・・・剣なんです。柄にZMの文字が入ってました」

「純って・・・」

「傭兵時代の護さんのたった一人の友人です」

霞は記憶の糸を辿っていた。確か、戦時中共に戦った仲間が居て、凄く大切な仲間で、その人が居たから今の自分が居るって。そんなことを護がちらりと言っていた。その人の話をするときは凄く嬉しそうで、でも凄く悲しそうで・・・護りたかったのに自分の目の前で殺された・・・。

「純さんがよく私に見せてくれました。護と親友になった証だつて。いつか離れ離れになつても共に過ごした短い時間を忘れないように二人のイニシャルを刻んだんだそうです。そのときの純さんの顔が凄く優しく子供みたいに嬉しそうで……。ただ、護さんはキモいから止めるとか言つてましたけどね。はは」

そういえば、出会つてから私の知る限り、いつもロングソードを持つてた。小さい体になつて持ちづらそうだなあつて思つてたけど、それでも肌身離さず持つてたし、いつも剣の手入れだけには余念がなかつた。剣士が自分の剣を大切にするのは当然かつて思つたけど

「そ、そんな大切なものをどうして……。？」

「私たちのために決まつてるじゃないですか！！！！」

霞の的外れな質問にレナスは霞を見ることも無く俯いたまま叫んだ。

レナス、泣いてる？ そうだよね。レナスにとつてもその人は大切な仲間だつたんだよね。今は亡き人と繋がつていられる心から大事な物だつたんだよね。……。レナスでも辛いんだもん。護。もつと辛いよね。……。私たちのために……

霞はすくつと立ち上がった。

「霞さん？」

霞はレナスに返事もすることなく扉に走りより、そのまま夜の町へ駆けて行つた。

泣く

「さてさて、寝るべ寝るべえ」

護は、町の一角にある広場のベンチに横になった。キャンプ場でテントでも張ろうかとも考えていたが、そういえばテントとかの荷物はあのおっさんの家に置いてきたことをキャンプ場に向かう途中で気が付いたのだ。

何故かメンバーみんな、いつもと違う雰囲気をかもし出していたため今更取りに戻るのも行き辛いと思い、それなら適当にその辺で寝ればいいやと町をうるついでいたらこの広場にたどり着いたのだった。

鞆を枕、マントを布団代わりにしてさくさく眠りに付こうとする。しかし、一向に寝れる気配が無い。

何故自分は霞に殴られたのか？最近霞の態度が変だと言う何があつたのか？何故喧嘩をしていたのか？

答えの出ない疑問が頭の中を駆け巡る。同時にあいつの顔も思い浮かぶ。剣を手放してしまったこと。仲間のことを大事にするかあいつに誓ったのにそれが出来ない事。護の中ではひたすら疑問と自責の念が交錯していた。

「やっぱり、僕には無理だよ。お前がいたらなんて言ったかな・・・」

ポツリと呟いた言葉は、夜の闇に吸い込まれ消えていく。

寝ることが出来ず空を見上げ星を見つめているとお腹が鳴った。そういえば夕飯を食べていない。このまま考えてても答えは見出せそうになかったし、寝れないのなら何か食べてくるかと体を起こす。

この町は比較的夜遅くまで店がやっている。町にもまだまだ人が出歩いていていた。

「はあ、何処に行こうかねえ」

町中を再びうるつきながら、食事を出来るところを探す。今の気

分としては落ち着いてのんびり考え事が出来そうな雰囲気ある店が良い。変に喧騒のある店、さっきの大衆酒場みたいなところは遠慮したい。

この町にそんな雰囲気のある店なんてあつたかなあ。あんまり金がないから高いのも困るし

店や看板を眺めつつ、良さ気な店はないものかと見ては立ち止まり見ては立ち止まりを繰り返しながら歩いていく。

そんな折、ふと二階から淡い光が漏れている小さな店が目に入った。下から見ていたためよく店内は見えなかったが、何処が他の店と違いシックな装いの良い雰囲気をかもし出している。

「なんかあそこがよさそうな気がする」

自分の直感に従い、その店の方向へと足を向けた。店内の入り口に通じる階段には、「旅人の憩い」という看板が掲げられている。二階の窓を見上げながら店へと歩いてみると、誰かとぶつかったというよりぶつかられたといった方が良い。

「あ、すみません。よそ見してて……って、あ」

「いえ、こちらこそ急いでて……」

謝りながら護は幽霊でも見たような顔をする。ぶつかった相手も護を見て複雑な表情を見せた。

「こんなところで何してるの？」

「そっちこそ、何処に行つてたのよ!？」

「部屋で休んでたんじゃないの？疲れてたんでしょ？」

「さ、探してたのよ……っの、馬鹿！バカバカバカ!！」

「？」

「本当、馬鹿なんだから!」

「それが言いたくて探してたの？」

「……違うけど、それもある」

「……よく分からないけど、何か話があるならその店で話さない？僕、お腹空いてて」

「……うん……」

急に素直になつて護の後ろを付いてくる。二人は「旅人の憩い」に入つていった。

店の中は外から見たイメージどおり、落ち着いた大人の店といふかんじのバーで、護にはありがたいことに客がほとんどいない。二人はカウンター席に腰を下ろした。

「シルビアのロックを一つ。あと、なにかつまみになるものを適当に見繕つてもらえますか？食事とつてなくて」

「畏まりました。お連れ様は？」

「あ、私にもおつまみください。飲み物はチコリジュースを一つ」
「畏まりました」

物腰優雅に店員は注文を受け付ける。

「あれ？さっきの酒場でご飯食べたんじゃないの？またお腹が空いたの？」

「ううん。実は私は食べてないの。他のみんなは食べたけど」

「なんで？」

「え・・・？。えーっと。その、護が食べないで宿屋を探してくれてるのに自分たちだけ食べたら申し訳ないかあって」

「はは。そんなこと気にしなくて良かったのに」

「私は気にするの！・・・やっぱり一緒にじゃないと」

「ふーん。ありがとうございます」

「べ、別にお礼なんて」

深々と頭を下げた護に対し、照れたように手を振っている。

「お待ちどうさまでした。先にお飲み物の方をどうぞ」

「あ、どうも」

二人はグラスを受け取ると静々と口をつけた。

「で、話つて何？霞」

「え！？うーんと・・・」

霞は何から話して良いかわからなかった。見つけたら言いたい事は山ほどあったのに今はその言葉がうまく出てこない。

護はただグラスに口をつけながら黙つて霞の言葉を待った。

「う、ごめんなさい」

搾り出すようにようやく霞は一番伝えなければならなかった言葉を口にする。

「何のこと？どうしたの突然？」

護は霞の意外な言葉にキョトンとして聞き返す。

「あの、その、宿屋のことです。だから・・・剣を・・・」

「ああ、そのこと！いいよ、気にしないで。僕からあのおっさんに頼んだことだし。剣一つで宿が手に入るなら安いものだよ。っていうか、本当にあの剣って高かったんだなあって所有してた本人が一番びっくりだ。あはは」

護は軽く笑ってまたグラスに口をつけた。その護の態度が、言葉が、霞には余計に罪悪感を感じさせた。

「よ、よくない！だって、あの剣って大切な友人さんの形見なんですよ？」

「ん？レナスに聞いたの？」

「・・・うん」

「はは、だったら尚更気にしないでいいよ。仲間のためにこういう使い方したなら、あいつだって許してくれる。むしろ仲間想いの奴だったから喜んでくれるかもしれない」

「で、でも、やっぱり駄目！いくら仲間だからってそんな大切なものをこんな簡単に手放しちゃ。そもそも私たちがわがまま言ったのが悪かったんだし」

「いやいや、長旅で疲れてるんだもん。楓の言う事ももっともだ。

これからプランに、魔界に行こうとしてるっていうのに今のうちにしっかり休んどかないといけなかったしさ」

「だ、だからって、形見を・・・」

「気にしない気にしない。そんなことより、せつかく宿取ったんだからしっかり休んでなきゃ。そうじゃなかったらなんのために剣を手放したかもわからないでしょ？」

「あ・・・。ごめんなさい」

「そういえば、レナス怒ってた？ 剣の事で」

「うん。レナスには珍しく怒ってた」

「あちゃー。そっか。レナス、あいつと仲良かったもんなあ。本来あの剣だつてレナスが持っていたかつただろうに」

「・・・」

霞はまた黙り込んでしまった。護は別に気にしているわけでもなく平然としていたようだったが、霞は護が無理をしているということに気がついていていた。こういうときの護は妙に明るいのだ。

「はい、お待たせしました」

店員がおつまみを護たちの前に置く。

「おー、待つてましたあ。もう腹減つて腹減つて。動植物様、農畜水産業者様。いただきます！」

護は手を合わせ深々とお辞儀するとフォーク片手に、パクパクと食べ始める。

「うん！ うまうまじゃ〜！！・・・あれ？ 食べないの？ 美味しいよ？」

「あ・・・うん。いただきます」

霞も護に促されて食事に手をつける。

「あー、駄目駄目駄目。駄目だよ霞君」

護が突然、食事を始めた霞に文句を付け出した。

「な、何が？」

「食事つてのは、そんな暗い表情して食べちゃ駄目つて事。せつかく、この食事ひとつひとつに動植物様の尊い命と、農畜水産業者様の血と汗と涙が詰まつてるんだから、もっとこうありがたみを持ちつつ楽しく食べないとね！ 食事は、人生において睡眠に次ぐもっとも幸せなひと時なはずなんだからさ」

「そ、そう？」

「そう！ はい、では最初からやり直しい」

護に言われ、霞は手を合わせ深々とお辞儀して「いただきます」と若干先ほどよりも元気よく声を出した。護は、満足したようにう

んうんと頷いている。

「で、時に霞さん」

「え、な、何？」

「実は自分、気になってることがあるとです」

「何を？」

「なんで、霞さんはあの酒場で喧嘩なんてしてたんですか？」

「・・・それは・・・」

「それから、なんで僕は殴られたんですとです？」

「・・・ごめんなさい・・・」

「いや、それは良いがとですけど・・・このしゃべり方案外疲れるな・・・で、何があつたの？」

「・・・あの深い意味は」

「ないのに僕は殴られたんですか!？」

「い、いや!ありま・・・す」

「ほほう。ではその深い意味とやらを是非とも聞かせてもらおうじやないですか」

「あ、あのね。護さ」

「うん」

「ほら、レナスを仲間に入れたじゃない」

「駄目だった？」

「ううん!駄目じゃないんだけど・・・」

「けど？」

「仲間にするとき、私たちに全然相談なかったし」

「それは、すみません」

「ううん。それもいいんだけど」

霞はなんとすべきか、困っていた。素直に自分の思っていることを口にすべきかどうか。

「すみません。シルビアをストレートで一つください」

霞は店員にお酒を頼み、受け取ると気持ちを決めるかのようにそれを一気に飲み干す。

「ふー。．．．あの、私、寂しかった．．．の」
「？」

「だって、護。レナスが仲間に入ってから、ううん。レナスと出会ってからずっとレナスレナスって。レナスとばかり話をするし仲は凄く良いし。なんか、私、ずっと一緒にいた仲間なのに、全然相手にされてないって言うか」

「そう？」

「そうだよ！私が話しかけても相手にしてくれないし。こうやって二人で話するのだって凄く久しぶりじゃない。私だって．．．かまっつてほしかつたんだもん．．．」

最後をぼつりと呟く。

「へー、あの霞ともあろうお方がそんなこと考えてたの？」

護はさも意外そうに驚いた。

「わ、悪い!？」

「いや、悪くはないです。霞も子供っぽいところあるんだね」

霞は照れを隠すように強く言い放ち、護は笑っている。

「まあ、でもそれはしょうがないと思ってよ」

「なんで？」

「えー？だって僕、レナスの事好きだもん」

え!？」

護のこの言葉に、霞は戸惑った。

「す、す、好きってどういう意．．．」

「レナスは僕のことよく分かってるし、僕女性は苦手だけど、レナスとだったら付き合っても良いかなあ」

ああ、やつぱり．．．

「．．．」

霞は呆然としている。

「本当はねえ、他に気になる人はいたんだ」

「．．．」

「それが、自分にとって好きって言うものなのかどうかわからない

「ただけど、でも、気になる人でね」

「・・・」

「でもねえ、もし好きなんだとしてもなんかその人には思いが通じなさそうな気がしてさ。だから、あきらめようかなあとか思ってた」

「・・・」

「僕さ、お袋たちから彼女作れつつうるさく言われてさ。ほら以前お見合いの話もあったじゃん？だから、お見合いのほうでも勝手にセッティングされてね。でもどうせ付き合うなら見ず知らずの人より知ってる人のほうが良いでしょ？お袋もお見合いより恋愛のほうが全然いいっていうし。まあ、それならレナスかなあって。よくお互い知ってるし。まあ、もし付き合わなきゃならない状態になったら付き合ってもいいかなあって思ったって言うくらいなんだけどさ。あっははあ」

笑っている護を尻目に霞は固まったままだ。どうやら護の声は届いていないらしい。

「うう・・・うわーん！」

しばし一点を見つめていた霞が突然泣き出した。護はこれにはびっくりする。

「え！？どうしたの、霞？」

「えぐっ・・・ひっく・・・ううう」

「な、な、何？何があった!？」

「おやおや、お客さん。罪作りですねえ。女性を泣かすのは良くないですよ」

「え？僕のせい？」

店員から突っ込みを受け、さらに戸惑う護。

「霞、ちょ、本当どうしたの!？」

護にかまわず霞は大粒の涙を流して泣いている。静かな店内に、霞のすすり泣く声と護の戸惑った声だけが響いていた。

泣く（後書き）

あとがきですとです。

現在風邪真っ只中でしんどい作者です。

今回は久しぶりに護と霞のふたりっきりの話だったので濃厚なのかいてやるとか考えてたんですが、風邪で頭回らなくて変な展開になつてきました。もしかすると後で修正掛けるかもしれないですが、まあお気になさらずにお楽しみくださいませ。

交渉成立？

「だーかーら！どうしてお姉さまがあんな辛そうな表情なさってたんですか！！」

夜中も三時を回ろうかという時間、テリシヤの町の一角にある広場に怒声が響き渡っていた。

「ちょ！夜中なんだから静かに！」

「護さんの声の方がうるさいです！」

「と、とにかく静かに！」

護は息を殺して相手をなだめた。しかし、あまり聞き分けのある相手ではない。楓だ。楓は夜中に宿の方に戻ってきた霞の様子を見て、状況も何も一切合切把握することなく霞と入れ違いざまに飛び出してきたのだった。

「大体なんで楓が出てくるのさ？寝てたんじゃないの？霞にしても楓にしても、疲れてたって言ってた張本人じゃん。なんのために宿を取ったんだか・・・」

ため息混じりに楓に投げかける。

「ええ！疲れてますとも！できれば、暖かいベッドでお気楽極楽天まで昇る気持ちで眠りこけていきたいですよ！」

「だったら、寝てればよかつたじゃん」

「寝れるわけないでしょ！お疲れのお姉さまを私が癒してあげようと夜這いしに部屋に行ったらもぬけの殻だし。下ではレナスさんが神妙な面持ちしてお姉さまは出かけたとか言うし。心配で帰りを待ってたら目を腫らしたお姉さまがやってくるし！あの悲しげな目で微笑んでたの見て、私思わず鼻血が出そうになったわよ！！」

「はあ？」

「ちがーう！そうじゃなくて！何があつたんですかって聞いているんです！」

夜中だというのに良く分からない発言をハイテンション・ノンブ

レスで一氣にまくし立てる楓に護もいい加減疲れてきた。

「霞とはさつきまでご飯食べてただけだよ」

八工を払うように手を振り面倒くさそうに応える。

「うそ！ご飯食べてただけで、あんな毛を刈られて震える子羊のようになりますか！」

「また、よく分からない例えを」

「あんなお姉さま。嫌いなトマトを隠したのにバレて無理やり食べさせられたときしか見たことないっていうのに」

「え？霞、トマト嫌いななの？」

「そうですよ」

「へー、そりゃ知らなかった」

「他にもですねえ……って何とんでるんですか！話をはぐらかさないでください！」

「勝手に暴走してるくせに……」

「そ・れ・で！」

ぶつぶつ文句を言っている護に楓は一喝する。

「護さんは、どんな酷いことをしたんですか!？」

「僕は何もしてない」

「だーから、うそを言うなって言ってるでしょ、このおガキ様は!……頭引つつかんで背中見えるようにしてあげようかしら?」

「あ、あの、本当に何もしてないんですっ!」

若干目が本気になってる楓の殺気に気圧され、護はビクつきながら必死に無実を訴えたが楓は信じようとしなかった。

「どうせ、護さんがやらしいことしようとしたんでしょ!」

「するか!」

「何でしないんですか!私だったら……」

「あのさ。本当に何もしてないから……って、私だったら?」

「とーにーかーく!じゃあ、なんでお姉さまはあんなに辛そうな表情を浮かべてたんですか?」

キョトンとして聞き返す護に軽く咳払いをして、ようやく落ち着

いたかのように本題に入ってきた。

「僕が聞きたいよ。いきなり泣き出すんだもん。普通に話してただけなのにさ」

「何を話してたんですか？」

「えー？なんだったかなあ？」

「そこが肝心なんですよ！思い出しなさい！」

「んー・・・確か、レナスを仲間にしてからあんまり話をしなくなつたのかなんとかだったと思うけど」

「話つて、護さんとお姉さまがですか？」

「他に誰がいる？」

「なんでそんなことでお姉さまが泣くんですか？」

「だから、僕が聞きたいって言ってるでしょ？」

意味が分からないといった感じに楓は首をかしげる。しかしそれは護とて一緒だった。

「僕にも良く分からないけど、なんか霞にも思うところでもあったんじゃない？お酒入ってたみたいだし」

「うーん」

さつさと寝てしまいたい護の態度に対し、楓はまだ納得いかないようにうんうんと唸っている。

「あのさ。また明日にでも霞に聞いて見たら良いじゃない。ここで悩んでたつて無駄に時間が過ぎるだけだと思うよ？」

「うーん」

「ねえ、本当さ。僕も眠いのよ。楓も疲れてるんなら早く帰って寝たら？」

「なーんか引つかかるんですけど」

「何も引つかからないから！はいはい、帰って寝た寝た」

護は、まだ考えている楓を無理やり押して帰らそうとする。

「ま、待つてくださいって！分かりました。とりあえず今日は退散しますが、もし明日お姉さまの口から護さんのせいって言葉が出たらそのときは命の保障はないと思ってくださいね」

・・・この子怖い・・・

「じゃあ帰りま・・・って」

「ん？」

「宿ってどこですか？」

「はあ？」

「道分らないって言うてるんですよ。そこまで説明しないと分からないほど頭も幼児化してるんですか？まったく・・・」

「そうじゃなくて。道が分からないって、じゃあ、ここまでどうやって来たのさ？」

「自分の足で来たんですよ？護さんって馬鹿？」

・・・おちよくられてるんだろっか？

「場所が分からないのにどうやって僕を見つけたかを聞いているの」

「それは、町中を走り回ってたら護さんがここで寝てるのを発見したんですよ」

「・・・」

「なんですか？」

「分かりました。送りますのでさっさと行きましょう」

半ばあきらめたように肩を落とすと、眠い目をこすりつつ護は楓を宿まで送り届けた。

翌日。

「おはようございます」

「おはようございます」

「おはよう」

楓はラウンジで紅茶を飲んでいるレナスと霞に挨拶をした。時は、昼近く。楓にしてはかなり寝過ぎた時間である。

「楓には珍しく今日はお寝坊さんね」

「ええ、ちよつと昨日寝たのが遅かったものですから」

「そういえば、昨日夜中に慌てて出て行ったけど、どうかした？」

霞は何事も無かったかのように涼やかな顔をしている。

「ええっと、実は護さんに会いに行ってたんです」

ちよつと言葉を濁すように楓は言つ。

「護に？何故？」

お姉さまの事を聞くためですとは言いづらく、しばらく言葉を考えた。しかし、やはり昨日の霞の様子は気になる。

「い、いえ。ちよつと私用で」

「ふーん」

霞は特に気にもしないようにゆっくりと紅茶に口をつけた。

「楓さんも何か飲まれますかあ？」

「あ、レナスさん。いただきます」

「紅茶が良いですよね？ちよつと待つててくださいねえ」

レナスはのんびりとした喋り口で軽く微笑むと台所へと向かつて行った。レナスも、とても昨日怒っていた様子など微塵も感じさせない。

楓は、霞の前の椅子に腰をかける。なんと言って良いか分からなかったが、とりあえず霞の表情を読もうとじつと霞を見つめた。霞は普段と変わらない表情をして、腫らしていた目も元に戻っている。

「ん？何？私の顔に何かついてる？」

霞は楓の視線に気がついて静かに微笑む。

「はあ、やつぱりお姉さまは素敵ですねえ」

「そんな霞に思わず見惚れてしまう。」

「な、何よ？」

霞は尋ねても答えることなくうつとりとして見つめてくる楓の視線に照れる様に顔を背けた。

「あの、お姉さま」

「だから何？」

「お聞きしたい事があるんですけど」

霞はコップをコトリと机に置く。手を組むと楓を見つめ返した。

「あのですね。昨日お姉さまは、その、様子が変でしたよね？」

「変？」

「なんか悲しそうだったというか、辛そうだったというか」

「そうかしら」

「そうですね。だって、目が……」

「目？」

「いえ。とにかく何かあったんじゃないかなあと心配しまして」

「そう、ありがとう。でも、なんでもないわよ」

「本当ですか？もしかして、護さんに何かされたんじゃない……」

「なんでそこで護が出てくるのよ」

「いえ、護さんに昨日聞いたら一緒にご飯食べてたとかって聞いた
ものですから、護さんと何かあったんじゃないかと」

「何も無いわ。気にしすぎよ」

「本当ですか？」

「やけに食いつくわね」

「いや、本当に何にも無かったなら良いんですよ。……チツ」

「はーい。お待たせさんでしたあ」

レナスが紅茶を持ってくる。

「わー、ありがとうございます」

楓は受け取ると直ぐに口をつけた。そして「アチツ」と口をそむ
ける。楓は猫舌なのだ。

「それで、レナスさっきの話だけど」

「そうですねえ。とりあえず、かけあってみたほうが良いんじゃない
いかとお」

「？……何の話ですか？」

「ちよつとね」

霞は眉をひそめながら窓の外を見つめた。レナスはいつもと変わ
らないようにニコニコと微笑んでいる。

一方、護は……。

「ねむっ」

大きな欠伸をしながら、町を歩いていた。時間は昼ちよつと前。

昨日は楓のせいでもほとんど寝れていない。本来なら昼過ぎまで爆睡

していたかった。護は基本的に一日十時間は寝ないと気分が悪いのだ。それでも朝早くから活動していたのは、この町の滞在理由のせいだ。

「くっそー。出航許可証出してもらおうと思ったのに、オルビスに問題があるっていうせいでもらえやしない。ただでさえ、出航許可証出してもらおう審査が厳しいってのに・・・」

テリシャの町では、ロージーからの出航許可証を発行している。実はこの町、これから大陸を離れようとする者達を審査して許可を出す役割を担っている。大陸によってそれぞれモンスターのレベル、気候、生活衛生、治安等々もろもろの条件によってランクが決まっているのだが、そのランクにふさわしくない者には許可は出さない。みすみす死なせたり、問題を発生させないためにそういう制度が作られたのだった。

その審査には時間が掛かる。だから護は朝っぱらから申請しに行つて、少しでも時間を短縮しようとしたのだったが、申請自体が却下されたのだ。

「まいったな。これじゃあ、プランに行けやしない」

何とか手を考えようとするが、寝てないために思考も回らない。まったく、どうも最近の問題ばかり起こる。もつと普通に旅が出来ると思っていたのに、こんなにも支障が出るとは。当初、一ヶ月ほどでプランには到着してるはずだったのに、もう出発してから一ヶ月半は経っていた。

「そもそも、パーティ内でなんか問題があるのがおかしい。仲間で動くって難しいなあ」

ずっと一人旅をしていた護にとって仲間を連れて旅をするというのがこんなにも大変なものだとは想像もできなかった。そう考えるとあいつは凄かったんだなあと今更感心する。

しかし、今はそんな事を言っていられない。なんとしても、魔界に行かなければならないのだ。いくら魔界の入り口が不定期に出現するとはいえ、もう少し急げばよかつただろうか。急いだからとい

って魔界に入れる保障はないのだが、これも天命か？

「あー、どうしよう」

頭を抱えながら、なんとかオルビスに向かう手段を考えていた。

さて、霞とレナスは護とは違い、また別の事で手を焼いていた。

「あの、なんとか返してもらいたいんですけど」

「だから、返さねえって言ってるだろ」

「だから、そこを何とかって言ってるんですけど」

「あんたら、すでにこの家で一泊してる上に飯も飲みもんも食ってるんだぞ？一宿一飯の恩義って言うもの知らんのか。それを、むしろ返せだなんて。そいつは出来ねえ相談だ」

「変わりに何でもしますから」

「俺はこの剣が気に入ってた。とにかく、この話はもうなしだ。

俺は約束通りあんたたちの面倒を見る。いいな」

「うー、返してくださいよお」

「しつこい！」

霞とレナスと楓、ふつくんは家を宿として提供してくれた眼鏡マッスルおっさんのところに居た。なんとか護の剣を返してもらおうと直談判に行ったのだ。

しかし、おっさんは剣を返してくれず、押し問答を続けていた。

楓とふつくんは何故たかだか剣一本ごときでもめているのかと不思議そうにやりとりを見ている。

「その剣は大切なものなんです」

「そんな大切なものだったら俺に渡さないだろうが！」

「それは事情があつてです」

「あの坊主があんた達に返してくれって言ってくれて頼んだのか？」

「違います」

「だったら、いいじゃねえか。あの坊主が良いって言ってるんだからよ」

「でも、それは本音じゃなくてえ」

「あーもー、うるせー!」

「ねえ、お姉さま。いいじゃないですか。そんな剣一つあげたって」「それが駄目なのよ」

「えー?」

霞とレナスは二人がかりで押ししたり引いたりなだめたりすかしたりとおっさんと話をするが、おっさんはがんとして断っている。もうかれこれ一時間は問答を続けているだろうか。

「あんたらも大概しつこいな」

「大切なものだからです」

「だから、そんなに大切だったら最初から渡すなっというんだ。それに、宿も直ぐ出てけばよかっただろうがよ。それを一泊すでにしてから返せだたあ、虫のいい話じゃねえか」

「考え直したんですよお」

「それは、遅かったな」

「おねがいです。変わりになんでもしますから」

「なんでもっていつてもなあ。あんたらに出来そうな事なんて無いんだよ。大体あんたら何が出来る」

「私、回復魔法を唱えられますよお」

「わ、私は・・・た、戦う事なら!」

「そんなもんなんの役に立つんだっつうの! 商売には何の必要もねえ。俺が人身売買の仕事してたなら、あんたら上玉だし、交換ってこともできたんだけどな。残念だ」

「売られても困ります」

「あんたら、何でもする言っただがな」

「とにかく、自分たちを売る以外でなにかないですかあ?」

「あーん」

あまりにしつこくすがつてくる二人に、ようやくおっさんは頭を廻らし始めたようだ。しばらくすること、おっさんの口からある言葉が発された。

「なんでもって言っただな?」

「はい」

「戦いが得意って言ったな？」

「わ、私ですが」

「よおし。だったら、一つ仕事をやってもらおうじゃねえか。それが解決できたらこの剣を返してやる」

「本当ですか!？」

二人は期待した目で聞き返した。おっさんはうんうんと頷く。

「おれあ、うそは言わねえ。約束は守る男だ」

「で、私たちは何を？」

「ある問題を解決してきてもらいたい」

「問題？」

「ああ。今、この町の交易がストップしてるのは知ってるか？」

「え、ええ。話には」

「その交易がストップしてるせいで、この町に滞在してる連中が増えてるんだが、実は俺も宿の仕事以外に船を持ってな。船を出せなくなってる非常に困ってるんだ」

「それで？」

「でだ。何で交易がストップしてるかって言うのは、なんでもオルビスで問題が起こってるかららしい。それも、治安的な問題だそう。話じゃ、誰やらが力に物を言わせて自分の好きなようにオルビスを陣取ってるらしいからなんだが」

「はい」

「その、陣取って交易できなくさせている元凶をなんとかしてこい」
「何とかというと？」

「それは、てめえらで考えろ」

「わかりましたあ。ではそれを解決すれば、返していただけるんですねえ？」

「おうよ」

「それで、オルビスまではどうやって行けば良いんですか？」

「それは、俺の船を使え。そこは貸してやるわ」

「ありがとうございます」

「礼を言われる筋合いはねえ。これはれっきとした商売だ。できな
けりゃ、船を貸した代金もふんだくるからそのつもりでいろ」

「はい」

「よし、交渉成立だ。じゃあ、後はさっさと支度して行って来い」

「え？今からですか？」

「もちろんだ。商売の世界はそんなに甘くない。俺は何年も待つ気
はねえぞ。船の準備は直ぐにしてやるからよ」

「わ、わかりました。じゃあ、護を見つけて直ぐに」

「ん？坊主も連れてくのか？あんなガキんちよを危険な所に連れて
行くのは関心せんなあ」

「い、いえ。とにかく護には話をしておかないと」

「では、護さんのところに行きましょうお」

話がまとまった所で、霞とレナス、楓、ふつくんは、護を探しに
町に出て行ったのだった。

交渉成立？（後書き）

あとがきですたーい！

どうも、不肖な作者です。

今回でようやく話が修正できた気がします。実は、今回のテリシヤの話は当初予定に無かったもので、軽く滞在すれば良いかなあ程度にスルーするつもりだったのに、その場の勢いで書いてみたら、収集がつかなくなって何時の間にか話がややこしくなってしまうた。

王道ファンタジーから外れてきた気もするし、大体第三章は楓とふつくんがメインなのに出番が少なくてどうよ？って状態ですが、楽しんでいただければ幸いです。

では、またお会いしましょう。

オルビス到着

「・・・ようやくみつけた・・・」

「誰だ？」

「・・・貴方は大切な人を傷つける・・・」

「何を言つて・・・」

「・・・いつか、その手でその人を・・・」

「誰なんだ？」

「・・・クス、また会いましょう。時が満ちたらね」

ザザーン！ザッパーン！

船は軽快に大海原を進んでいた。護は、デッキに一人立ち、ボートと波の流れを見ていた。

誰だつたんだろう？何処かで出会つたことがあつただろうか？記憶の糸を手繰りある人物を見つけ出そうとする。しかし、記憶の中にその人物の姿はない。ただ、感覚だけが覚えている。自分はその人に会つたことがある。そんな確信じみたものは感じていた。

・・・一体何を言いたかつたんだろう・・・

海は何も語るうとはしない。

「護、こんなところに居たんだ」

「あ、霞」

「どうかしたの？」

「いや、なんでもないんだ」

・・・大切な人を傷つける・・・その言葉だけが頭を過ぎっていく。

「？なんかあつた？」

「いや、本当になんでもないんだ」

「そう、だつたらいいんだけど。護は船に酔つたりとかしないの？」

「え？うん。霞は平気？」

「ええ。私も平気。ただ、レナスと楓は寝室で唸ってたけど」

「まあ、この辺りの潮の流れは速いし、結構時化ってるから普段酔わない人でも酔い易いんだろうね」

「そうね」

「でも、良かったよ。船が手に入ってくれて。正直オルビスに行けなかったらどうしようかと悩んでいたんだ」

「まあ、あくまで借りてるだけで、やることやったら返しに戻らなきゃならないんだけどね」

「それでも、運航をストップさせてる原因をなんとかすれば、戻っても直ぐに船の許可証はでそうだし」

「うん」

「しかし、別に良かったのに」

「何が？」

「剣のこと」

「あ、ううん気にしないで。私たちがただそうしたいって思って勝手にやってることだからさ」

「まあ、そのおかげでこうして船に乗せてもらってるわけだし、結果は良かったといえるかな」

テリシャの町で護を見つけた霞たちは、事情を説明し、そのままロージーへと向かった。そして、そこで用意されていたおっさんの船に乗り込みオルビスに向けて航海を開始したというわけだ。

ただ、護にはちょっと気がかりなことが一つ出来ていた。

ロージーの港町についた早々、用意された船はどれだろうねと皆が見て回っている間、旅に必要なものを買い出しに行っていたときある女性と出会っていたのだ。その女性は護のことを知っているらしく軽く笑うとなにやら言葉を言い残して去って行ってしまった。

護はすぐさま後を追ったが姿を見失い見つけることは出来なかった。その女性の言った言葉が何故か凄く頭に残り引つかかっていたのである。

「ねえ？」

「ん？」

「やっぱり何かあったんじゃない？」

「ええ？そんなこと・・・」

「だって、なんかどこか上の空って感じだよ？」

「そう？気のせいだよ。久しぶりに海の上にいるからそういう風になつてるだけじゃない？」

「そっか。剣のことだったら大丈夫だからね？」

「あはは、いいつて。剣のことは気にしてないよ。そういう霞こそどうなん？」

「え？」

「いや、一見平静を装っているように見えるけど、どこか暗いよ？ほら、この間も食事のとき急に泣き出したしさ」

「あ、あれは」

「何かあったのなら話聞くよ？霞が人前であんな子供みたいに泣くなんてめつたにないじゃない。あの時は、話聞く前に帰るとか言つて帰っちゃったから聞くに聞けなかつたけどさ。どうした？」

「な、なんでもないわ」

「んー？なんでもないことないだろう？」

「ほ、本当大丈夫だから！」

「ふーん。まあ、言いたくないなら無理に聞かないさ。他人が踏み入れちゃいけないことなのかもしれないし。でもね。魔界に行くまではないはその心の負担なくすようにしておいてね。でないとい発で喰われるよ？」

「う・・・ん」

「さてと、楓たちの様子でも見に行つてくるかね」

背伸びをして部屋の入り口の方に向かおうとした護に霞は慌てて声を掛けた。

「え、あ、そつとしておいてあげようよ。私今様子見てきたところだし。ふつくんが付いていてくれてるしさ。変に行つて気を使わせるのも今はしんどくない？」

「うーん。そっか」

「そうだよ。それよりさ、もう少しゆっくり話でもしてない？」

何か隠しているような雰囲気を見て、なんだろうといろいろ勘ぐってどうしようかと考えたが、そのうち本人が話してくれるだろうと割り切りニコリと微笑んだ。

「いいよ」

二人はデツキの柵に肘をかけ海を見ながら話し始めた。海風が二人の髪を撫でていく。

オルビスに着いたのは、翌日の朝方だった。普段は活気付いていないはずの港には今は人影もなく閑散としている。

「や、や、やつと・・・つき・・・ましたね。おえ」

船酔いにもろにやられた楓がふらふらと棧橋を渡り大地に降り立つ。

「うう。私もこんなに酔ったの初めてですう」

同じくふらふらと口を押さえつつレナスが楓の後ろに続く。

「大丈夫でしゅか？」

心配そうにふつくくんは二人を見上げている。

「も、もう、乗り物には乗りたくない。地面万歳・・・」

楓はガクツと膝と手を地面についた。

「二人とも大丈夫？」

「大丈夫か？」

そんな二人の後から霞と護は緊張感もなく声を掛けた。

「くう！涼やかな顔して！この苦しみが分からないなんて羨ましい・・・。護さんなんて海に落ちてサメの餌になればよかったのに！」

「おいおい、ひどいなあ。霞だって平気じゃん」

「お姉さまは良いんです！お姉さまが苦しまれるくらいなら、私がどれだけだって代わって差し上げます！」

「あ、ありがとうございます」

「いえ・・・うえ」

「はあ、まあいいけどさ。にしてもやっぱり交易がストップしてる

せいか静かなもんだなあ。誰もいやしない」

「そうだね」

「んー。それにしても静か過ぎる気がするけど。いくらなんでも港沿いの店まで閉まってるなんて変じゃない？」

「朝だからじゃない？」

「いや、だつて霞。ここ港だよ？普通、交易がなくても地元漁師とかの船が出るはずだから少なくとも朝の競り市とかやってても不思議はないのに。どこもかしこも閉まったままじゃん」

「・・・言われてみれば」

「仮に朝の競りが終わったとしても、そういう気配がひとつもないのはやっぱり変だ」

「これも、その陣取つてるとか言う奴の影響かな？」

「かもね。僕の知ってるオルビスとは少なくとも一致しないし。とにかく町の中心地に行つて見よう。なにか様子が分かるかもしれないし。情報も掴まないかね」

「うん」

「おしー！じゃ、いくよー」

「えー、もう行くんですか？もうちょっと休ませてくださいよ。護さんの鬼！」

「・・・。レナスも休んでいきたい？」

「わ、私は・・・大丈夫・・・です」

「・・・。わかつたわかつた。もう少しここで休んでから移動することにしよう」

「あー」

「うー」

「乗り物酔いって大変なんでしゅね」

「ふつくんは平気だね」

「はいでしゅ。揺れるの楽しかったでしゅよ」

「そっか。海の男になれるな、ふつくん」

「海の男でしゅか？なんか、かつこいいでしゅねー！」

護にそう言われ、テトラの上に乗るとキラんと凜々しく海を眺める。

護はそんな姿を見てニコニコとしながらふっくんの隣に行くと泳いでいる魚を見始めた。

オルビス到着（後書き）

あとがきですよん。

今回はちよつと短めに書きました。オルビス内部の情勢にまで触れるところまで行こうかと思っただんですが、切が悪いのでここでいったん区切ります。

最近ちよつとストーリーとは別の幕間みたいな物語りも書こうかなと思案中。旅をしている間のちよつとした閑話休題的な話です。所々に入れていこうと考えていますので、それはそれでメインストーリーとは関係なくお楽しみくだされば幸いです。もしかすると次回はその幕間話かもしれません。未定ですが。では、またお会いしましょう！

閑話休題〜旅の一時〜

「我が求むるは、純粹なる力の源。内に秘めし生の流れを共に歩むものに分かつことを願わん。例えわが身が枯渴しようとも彼の者に大いなる力を与えん！」

楓は厳かに呪文を唱えると、バツ！とふっくんの手をかざした。

「・・・」

「ど、どう？ふっくん。何か感じた？」

「何も感じないでしゅ・・・」

ふっくんは尻尾を下げ申し訳なさそうに声を出した。それを聞いて楓ははあくため息を付く。

さつきから何度も何度も呪文を唱えてはふっくんに手をかざしていた。しかし、一向に変化は見られない。

ロージーに向かう途中の街道沿いに設けられたキャンプ場で、護達パーティーは休憩を取っていた。

楓はこの旅の間になんとか召喚師として力をつけようと度々こうして練習をしていたのである。

しかし今のところ上達の兆しはない。

「ん〜。なんで何にも感じないんだろう？魔力を注ぐだけで良いんでしょ？ちよつと！護さーん！！本当にこの呪文で魔力を注げるんですか！？」

楓は護に問いただした。今自分が唱えていた呪文は護が教えてくれたのだ。当の護は霞の稽古に付き合っていた。

「えー！？多分それで良いと思うけど？僕の知り合いの召喚師が唱えてた呪文列だから、間違いないと思う」

「でも、何度やっても何の変化もないんですけどー！」

「ん〜、楓さあ。呪文唱えてるとき、自分の中に魔力が流れてるのを感じてる？」

「え？いえ」

「おい！それを感じられなかったら、どうやって注ぐんだよ。まず自分の魔力の流れを掴まなきゃできるわけないでしょ。何？今までそれもできないで呪文唱えてたの？」

護は呆れながら聞く。

「そうなんですか？だって護さん、これ唱えてれば大丈夫って言ったじゃないですか！」

「それは、自分の魔力を把握してると思ったからだよ！教えるときに聞いたら、自分の中で何かが流れてるのを感じましたって言うってじゃない」

「それは、お姉さまに教えてもらった魔法を唱えようとしたときに感じたからそういつたんですよー！とにかく、どうやったら自分の魔力を感じられるんですか？」

「えー」

護は面倒臭そうに声を上げた。正直今は霞の相手をしている。確かに護は面倒見が良いが、二つ三つと違うことを同時にやれるほど器用ではない。

「ちょっと、霞。悪いけど待っててくれる？」

「いいよ」

霞に了承を得ると楓の方に行く。そしてふっくんの前に立つと手をかざし、楓の唱えていた呪文を詠唱する。

「大いなる力を与えん」

すると、護の手のひらがほんのり青く光りだした。

「どう？ふっくん？」

「あ！何か感じたでしょよ！元気が出てくる感じでしょ」

「どうやら、護の魔力をふっくんに注ぐことはできるようだ。」

「ほら。この呪文でちゃんと魔力注入はできてるじゃない。召喚師でもない僕でもできるんだから、楓ができないわけないんだけど」

「でも、何度やってもこんな感じになりませんか？」

「ん。楓、本当に魔力流れてるの？」

訝しげに護は楓に聞く。

「それは！護さん自体調べて流れてるって言うてたじゃないですか！」

「あー、そうだったね」

護は頭をぼりぼりかきながら笑った。

「じゃあ、楓は自分の魔力の扱い方を知らないって事だね。呪文構成列に魔力を乗せることができないわけだ」

「よくわかりませんが、そうなんですか？」

「そうだね」

「じゃあ、どうしたら魔力を感じられるんですか？」

「えー？とりあえず、精神集中して瞑想することからしたらいいんじゃない？」

「瞑想ですか……。わかりました。やりますよ！」

そう言うて楓はちょこんと座ると目を瞑った。それを見て、護はため息を付くとやれやれと言った感じに霞の元に戻っていく。

「おまたせ」

「うん、いいよ。なんか楓も大変そうだね」

「まあ、自分の魔力がつかめないようならどうしようもないからねえ。そう簡単に魔法を使えたら学校とか必要ないわけだし、何事も精進あるのみってことさ」

「うん。私も精進しないと。と言うわけで続きを教えてください」

「はいよ。で、何処までいったっけ？」

「だから、火の属性に風の属性を混ぜるってところ」

「あー、そうそう。この間言っただと思うけど、火っていうのは風によつて力を増すわけよ」

「うんうん」

「だから、普段使ってる霞の火の魔法も風を混ぜれば強力になるって訳」

「でも、私本来魔力持ってないから、指輪の属性以外の魔法って唱えられないんでしょ？」

「そうなんだけど。先人さんたちがそれを見越して、火の魔法にも

ともと風を増幅装置としていれる魔法を考案してるわけなのよ」

「そうなの？」

「うん。だから、風の属性を入れてるって言うけど一応火の属性の範囲に入るから、たぶん霞も使えると思う」

「そっか。じゃあ、教えてください」

「了解。それでは呪文構成列を言うね。しっかり覚えてよ？・・・黄昏よりも深い闇。訪れるは安息なれど、時に寂寞に駆られる。望む暁が照らす世界は新たななる生命の誕生を予見させるが、日の光は火の光となりてすべてを焦がす。ささやく風の言葉は惑わしの言葉・・・」

護の言葉を聞きながら反復して霞も言葉を口にした。

「燃ゆる火に風は笑う・・・までが呪文構成列。あとは発動言霊としてボルガノンと最後に言えば呪文は発動するはず」

霞は今の言葉を忘れないようにぶつぶつを言っただけだ。

「大丈夫そう？」

「え？うん。一応覚えた。早速やってみるね」

そういって、霞は両手を胸の前にかざした。呪文を唱え始める。

「黄昏よりも深い闇。訪れるは安息なれど・・・あれ？」

唱え始めていた霞は構えを解く。そして護のほうを見た。

「あのさ。この先なんだっけ？確か、望む暁が照らすって言う前になんかあったよね？」

「時に寂寞に駆られるだよ」

「ああ、そうだったそうだった」

護の教えてもらい再び構えると呪文詠唱に入る。しかし同じころでまた言葉を忘れた。

「えーっと、この先なんだっけ？」

「だから、時に寂寞に駆られる」

「あー、そうそう！なんか、唱え始めると忘れちゃうんだよね」

霞は笑いながら今度こそ大丈夫と何度も今の言葉を繰り返して呪文詠唱に入った。しかし、また同じところで言葉を失う。

「・・・あれ？なんだったつけ？なんで出てこないんだろ？」

不思議がつている霞に護は自分の指から指輪をはずし差し出した。

「これつけてみてよ」

「これは？」

「ん？風の指輪。これつけてもう一度唱えてみて」

護に言われ霞は指輪をはめる。そしてもう一度詠唱に入った。

「黄昏よりも深い闇。訪れるは安息なれど、時に寂寞に駆られる。

望む暁が照らす世界は新たなる生命の誕生を予見させるが、日の光は火の光となりてすべてを焦がす。ささやく風の言葉は惑わしの言葉。燃ゆる火に風は笑う・・・ボルガノン！」

今度はうまくすべてを詠唱することができ、発動言霊とともに霞の手から凄まじい炎が迸り、辺り一面を焼けつくした。

「おお！出た！」

「うん。やつぱりね」

あまりの激しい炎に唱えた本人がびっくりしていた霞に護が、うんうんと首を振りながら傍による。

「凄いいね、この魔法。ゴッドオブフェニックスよりもそんなに疲れないのに威力がありそう」

「まあ、そうだとは思っけど。あのさ、今度は風の指輪はずして唱えてみて」

「え？うん」

護に言われ風の指輪をはずすともう一度呪文詠唱に入った。しかし、先ほど唱えられていたのに、また途中で言葉を忘れる。

「あれ？さつきちゃん唱えられたのに」

霞はなんとか呪文構成列を思い出そうとするがどうやっても思い出せない。

「そうか。駄目っばいな」

「え？どういうこと？」

なにやらすべて分かったような口ぶりの護に対し、何がなんだか分からない霞は聞き返す。

「この魔法。一応火の属性専用で作られたとはいえ、やっぱり自分の魔力がない人には使えない見たいつて事。指輪の力だけに頼つてるとその指輪の属性しか使えないつて言うのは変えられないみたい」
「そうなの？」

「うん。今の魔法唱えようとしても言葉忘れちゃつてたでしょ？」
「うん」

「自分の使えない属性の魔法つて言うのは、魔力を呪文構成列に組みこもうとすると自然とブロックがかかって言葉が出てこなくなるんだ。大丈夫だろうと思つただけど、魔力のない霞には今の魔法使えないんだと思う」

「えー！今の魔法、強力そうて凄く気に入つたのに」

「しょうがないよ。属性が違つんだもん」

「えーえー」

護の説明に、霞は納得いつていないようだった。残念そうに声を出している。それを聞き護は少し考えた。

「じゃあさ。この指輪あげるよ」

「え？いいの？」

「うん。この風の指輪を使えば、今の魔法とか風の属性をプラスしたより強い魔法を使えるようになると思つし。僕はもともと風の加護を受けてるから正直必要としないしね」

「で、でも」

「それに、ほら、今日つて特別な日でしょ？僕からのプレゼントだよ」

「え？特別な日つて？」

「やだな。自分のことなのに忘れちゃつたの？今日つて、確か霞の誕生日でしょ？」

「あ！」

そう、今日は霞の生まれた日。護はそれを覚えていたのだ。

「覚えていてくれたんだ・・・」

「まあね。それくらいは覚えてないとさ。だから、僕からのプレゼ

ントだよ」

「い、良いの本当に？」

「うん」

「わー！ありがとう護！」

霞は嬉しそうに声を上げた。伝説の指輪をもらったということが嬉しいのもあるがそれよりも、護が自分の誕生日を覚えてくれてプレゼントをくれたことが何よりも嬉しかったのだ。

「すっごく嬉しい！これ、大切にするね！！」

霞はさっそく指にはめて空にかざしうっとり見つめた。

「綺麗……」

風の指輪は火の指輪のような燃える赤さとは違い、日の光を浴びて柔らかくエメラルドグリーンに輝いている。

「喜んでもらえて何より」

思った以上の霞の喜びように護は照れくさそうに頬を掻いた。実は護、霞の誕生日は覚えていたが、何をプレゼントしたら良いのか悩んでいたのだ。女性は何をあげれば喜ぶかなんて分からなかったし、改めてプレゼントするにしてもどこか恥ずかしくこういう時どうしていいのかなんてさっぱりだったので、ここ数日それで頭を悩ませていた。今回の指輪のプレゼントは良い機会だったし、なにより霞が喜んでくれたことが護をホッとさせた。

「ただ、風の指輪はね、他の指輪と違って凄い気まぐれなんだ。火の指輪と契約できたからと言って他の指輪とも契約できるとは限らないし、風の指輪の場合は特に癖があるから契約自体は出来ない可能性のほうが高い。だから、本当使うなら火の補助程度にしか扱えないかもしれないけど……」

「うん。それでもいい。私、契約云々よりこうやって護が指輪をくれたのがなんか、力が湧いて来るっていうか、護ってもらえるって気がするから」

「そ、そう？」

「うん。そ、それに、指輪をくれるって……ち、誓いの証みたい

だし・・・その・・・け、けっこ・・・」

「ん、何？」

「うん。なんでもない！」

霞はなにやら顔を真っ赤にして手を振っている。

「あー、それにしても火の魔法使うと熱いわ」

まだ霞の放った魔法により燃えている草むらを見て護は手で顔を仰ぐ。確かにここら周辺の気温はかなり上がっている。護の場合、気温のこともあるが慣れないプレゼントの恥ずかしさによる熱さもあった。

「うん。熱いね。魔法唱えるだけでも熱くなるっていうのに。あー

あ。私、汗かいてきちゃった」

額の汗を拭いつつ、霞もまた同様に手で顔を仰いでいる。

「ねー、護。確かこのキャンプ場にも水浴びできるところあったよね？」

「ああ、あったねそういえば」

「私、ちよつと水浴びしてくるね。汗ばんで気持ち悪いの」

「了解。じゃあ、その間にこの火の消火作業でもしてるよ」

「うん。お願いね」

その場から立ち去ろうとした霞は、ふと何かを思い出したかのようになり立ち止まり、改めて護の方に顔を向けた。

「護」

「何？」

「の、覗いちやだめよ？」

「はいはい」

護は何を今更と言った感じに呆れながら言葉を返し、燃えている草むらの消火作業に入った。

このキャンプ場から少し離れた森の中に、小さな滝と池がある。近くの山から綺麗な清流が流れ出しており、そこで水浴びが出来るのだ。

「ふー、旅で野宿とかしてるとお風呂にもなかなか入れなくて、そ

れがちよつと嫌よね」

水辺で服を脱ぎ、流れ落ちる滝の元に向かう。

「はあく、冷たくて気持ちいい」

顔を上に向け、落ちてくる水を当てながら火照った体をクールダウンさせる。

「ん、だいぶ髪が痛んじやったかなあ。サラサラなのが自慢だったのに」

自分の前髪をつまみ、見つめながらため息をついた。

昔はそんなことを気にしたことはなかった。周りから綺麗な髪だと褒められてはいたものの、あまり気にもとめていたなかった。幼少時、髪は長かったが剣の稽古や動くのに邪魔になるという理由で切った程、別に髪に執着などない。正直王女といってもあまり女らしく楚楚としていた記憶はなく、むしろ男勝りで活発であったような気がする。自分でもその方が好きだった。

こういったことを気にするようになったことに霞自身驚いたりしているが、今は必要以上にでも気にしたいと思う。

「もっと女の子らしい方がいいのかなあ」

改めて裸になっている自分の身体を見た。スタイルは良い方だと思う。別に太っているわけでもないし、足だってスラリとして長い方だろう。顔だって自分では分らないが、周りからは綺麗な顔立ちをしていると褒められているなら別に悪いわけでもない。ただ・

「やっぱりこれはどうなんだろう」

ペタペタ

「むむう」

自分の胸を触りながら唸り声を上げる。霞の胸は非常に小さい。極小だ。いや、見る人が見たら無いだろうと言うかもしれない。服を着ているとよく分からないが、こうやって脱いで見るとはつきりと分かる。昔、男装をして自分でも驚くほど似合ったことがあるし、男性より楓みたいに女性に好かれる経験の方が多い。

それが、自分にとってマイナスかと言えば、別にマイナスだと思
ったことはなかった。むしろ髪と同様に胸なんてあっても稽古とか
に邪魔なだけじゃないと思っていた。一時期、男に生まれたかった
と思っただけだ。

しかし、今はそのことが非常に気になる。

「女の子なら楓みたいに胸はあつた方がいいんだよね。男の人って
胸が大きい子が好きだっていうし」

楓のことを思い出してみる。胸は豊満で綺麗と言うよりも可愛い
という言葉がよく似合い、服装も可愛らしいのをよく着ている。自
分が仮に楓が着るような服を着たとしても似合わないだろう。イメ
ージすら出来ない。

「護も胸の大きいほうが好きなのかなあ？あーあー、どうやったら
大きくなるんだろう」

霞が自分の胸の小ささに悩んでいるとき、森の影からその姿を覗
いている者がいた。

「むふふうー！お姉さまの水浴び。こんなチャンス見逃すわけない
じゃない。キヤー！もう！素敵なお身体！！まさしく美の女神！」

楓は木陰から霞に見つからないように穴が開くほど霞を見ている。
本来こういつた視線等々に気づかないように霞ではないのだが、霞も今は
それどころではなく自分のことで頭がいっぱいだった。

「あーん！本当肌も珠のようで真っ白で、まさしく芸術だわ！」

「うむ。確かにええ身体しとるのお」

「私もあんな風に綺麗になりたいわあ」

「しかし、胸が小さいのがやはりわしとして好みではないが」

「そこがいいんじゃないですか！」

「いやいや、やはり女性は胸じゃろう？」

「そんなこと・・・って!？」

楓は声のした方を振り返ってみる。すると楓の横にザンドマンが
立っていた。

「あ、あなた！何しに出てきたんですか!？」

「何って？決まっておるじゃろ？そなたと同じ覗きじゃよ」

「私のは覗きじゃなくて観察です！じゃなくて、何見てるんですか
！！」

「良いではないか。わしだつて見たいぞ」

「ダメダメダメ！お姉さまの清らかな姿を見るなんて！さつさと消えなさいよ、このスケベじじい！」

「えー、わし、これが生きがいのに。覗きこそわが人生」

「やかましい！とにかくお姉さまの裸体をこれ以上見るなんて私が許しません！」

「それなら、女子おんなの裸を見せておくれ」

「あほぬかすなー！！」

楓はザンドマンの首を掴むとキュツと締めにかかる。

「ぐ、ぐるぢい・・・」

「お姉さまの裸を見る輩は万死に値です！」

「誰だ！」

さすがに声を大きかったためか、霞が楓たちのいる方に声をかけてきた。霞は直ぐにタオルを身体に巻いて、剣を握った。

「やばっ！ちよつと、あなたのせいでバレたじゃないですか！」

「わ、わしや知らん」

「出て来い！」

霞は、じつと楓たちのほうを睨み付け剣を構えている。

「ど、どうしましょう！こんなことでお姉さまの心象を悪くするわけには・・・」

本来、楓も女性なので別に霞の裸を見ようがさしたる問題はないのだが、楓として内緒で覗き行為をしていたということに悪いことをしたという感覚があるのだ。それにザンドマンもいる。

「そ、そうだ！ザンドマンが覗き行為をしていたので捕まえました
と言えは、問題ないじゃない！」

「女子、ずるいぞ！」

「だって、私お姉さまに嫌われたくないんだもん」

「こつなりや、姿をくらませ・・・」

「おっと、逃がさないわよお」

逃げようとするザンドマンを楓はがしっと掴んで離さない。そうこうしてるうちに、直ぐ近くから声が聞こえた。

「あら、なんだ楓じゃない。あなたも水浴びに来たの？」

霞はいつまで経っても出てこない相手を不審に思い、自らやってきたのだ。

「え、あ、はい！実は、私も稽古で汗かいたので」

「ふーん。で、このじじいはなんでこんなところにいるのかしらあ？」

霞は声のトーンを低くし、ゆらりと剣をザンドマンの首元に当てた。

「わ、わしゃあ何も見とらんぞ！女子が召喚の練習とか言っただけに呼び出されたのじゃ。わしにも何がなんだかさっぱり・・・」

「あ！何をいけしゃあしゃあと！覗いてたくせに」

「ほほお、覗いてたの」

「わ、わしゃしらんって！本当に知らんから！こんな老い先短い老人の言うことくらい聞いてくれたって良いじゃないかのお」

「だったら、さっさと消えなさい」

「う、うむ。消える、消えるぞ！」

そんな折、もう一人この場にやってきたものがいた。

「かーえーでー！ったく、何処に行ったんだよ。こつちか？」

森の間から護が姿を現したのだ。その場に居た全員が護の方を見る。

「あつ」

「ん？」

そのとき霞の身体に巻いていたタオルがはだけ、綺麗な裸体が見らわになる。

「いつ！」

「キヤーーーーー！！！！！」

ガッンっ！

思わず目を背けようとした護に霞の奇声と剣が投げつけられ、頭に直撃する。

護はそのまま倒れこみ意識を失った。

その後、再びキャンプ場を後にし旅路に出たパーティ内で護は必死に霞に謝っていたが、霞はそれからしばらく口を利いてくれなかったらしい……。

閑話休題〜旅の一時〜（後書き）

あーとながきです。がー。

どうも、ごぶさたしております。不肖すぎる作者でございます。

今回は閑話休題として、ちょっと旅の合間にあつた護たちパーテイの話を書いてみました。

話的にはたいした内容ではないんですが、何故書いたか？それは本編に入る前になんとなく書きたかつたから！です。

今回の話は、まだレナスを仲間にする前の話です。なのでレナスは出てきません。

一応本編の話はまとまっててさくさくと続きを書きたいなと思っていたんですけど、いらん思考が働いて別の話を書いてしまいました。実は最近、書きたいという衝動と、こんな駄作をわざわざ公開して恥をさらすのはどうよという葛藤に悩まされていまして、筆が進みません。はい、チキンです。

こんな駄目でチキンな作者であります、毎度お付き合いいただきありがとうございます。

では、また次回お会いしましょう。

顔面スピロヘーター？

島国オルビス。東大陸と北大陸の間に位置する交易都市。どの国にも属さず中立の立場を維持し、北大陸の唯一の玄関口であるとともにその他の大陸への海洋ルートを開拓した独立国である。

「さすがに街中まで来ると人は居るね」

「そりゃそうだよ。オルビスは独立国で小さいな国とはいえ、交易の中核を担う国だからね。財だつて豊富だから皆そこそこに裕福だしさ」

「でも、護さん。その割にはなんかテリシャみたいな交易町よりも活気がなくないですか？」

「うーん。以前来たときはもっと元気のある街だつただけど・・・」

街を歩きながら護たちは、様子を見て回る。護がかつて知っていたオルビスの活気は今や衰え、そこそこに人は歩いているものの、店や家々は戸を閉め切っているところが多く見受けられる。

「港といい街といい、やっぱり問題があるっていうのは本当みたいですねえ」

「えーっと、交易をストップさせて街を陣取ってる奴がいるって話だっけ？」

「うん。あの眼鏡のおじさんがそう言ってた」

「ふーん。じゃあ、とりあえず自治官長のところ行つて話し聞いてこようか」

「護。自治官長って？」

「ここの国を治めてるトップの人だよ。ここは国といつても別に貴族制を取ってるわけでもなく、もともと庶民の人たちが交易目的に集まつて開拓した国だから庶民の中から代表者が選ばれてるんだ。

その代表者を自治官長と言うんだよ。民主主義制度を採っていて王侯貴族による独裁政治とは違うかな。より具体的に民意が反映して

るし」

「ふーん。貴族制じゃないんだ……。それでも街は立派に成り立ってるのよね。今は別として」

霞は護の話聞いてなにやら思うところがあつたらしい。王女たる立場に居る霞にしてみれば、民主主義という言葉は耳にしたことはあつたが、現にこうして民だけの力で統治機構が成り立っているということがいまいちしくりこないようだ。

レナスと楓、ふつくんは護の後ろをついてきながら、街の様子をキョロキョロと見ている。そんな折、ふつくんの視線が一点に集中する。

「いいなあ・・・でしゅ」

ふつくんは、あるものを見つめたままポツリと呟いた。その言葉に隣を歩いていた楓が気づいた。

「どうしたのふつくん？」

「あ、楓しゃん。あのお兄しゃんが食べてるのが美味しそうだなあって思つたんでしゅよ」

「ん？どれ？」

楓はふつくんが指した方向を見る。すると、柄の悪そうな男たち数人が歩いていて姿が見えた。ふつくんが言っているのは、そのうちの髪の毛をつくんつくんに立てて趣味の悪いどピンクの服を着た男が食べている焼き鳥串のことのようだ。

「あー、焼き鳥？ふつくん、焼き鳥食べたいの？」

「はいでしゅ。そういえば、旅に出てから食べてないなって思つたんでしゅよ」

「そっか。じゃあ、あとで時間出来たら買いにいこっか！」

「はいでしゅー！」

そんなことをふつくんと楓がしゃべってる最中、そのチンピラ風情の連中の方から怒声が聞こえてきた。

「てめえ！どこ見て歩いてるんだ！？」

「い、ごめんなさい・・・」

「ああ？小さくて何言ってるか聞こえねえよ。ガキだからって何でも許されると思ってんじゃねえ」

楓とふつくんは再びその声の方を向く。すると、何やらチンピラどもが小さい女の子相手に掴みかかっていた。直ぐに母親と思しき女性がやってきて謝っている。

「すみません！すみません！ど、どうか許してやってください！」

「謝りや済むと思ってんのか？ああ！？ぶつかって俺たちが怪我したら困るのはそっちだろうがよ、ええ！？」

「はい！すみませんすみせん！！この子には私からきちんと叱っておきますので」

「はっ！代わりに怒っておくだ？はーん。子供の責任は親の責任ってなあ。じゃ、これも代わりに受け取れや！」

ドガツ！と男の一人がその女性に向かって思いっきり蹴りをいれた。女性が地面に倒れこむ。

「はっはっはっはっは！」

「おかーさーん！」

子供は母を蹴られて泣き叫び、男たちは愉快そうに笑っている。

その光景を見ていた楓は、カチンときてその場に駆け寄った。そして問答無用でチンピラ一人の顔面に飛び蹴りを喰らわせる。

「ぶっく〜ん！」

男は景気よく吹っ飛んだ。後からふつくんもやってくる。

「なっ！？」

「ちよつとあなたたち！」

楓はバーン！と母子と男たちの間に立ちふさがる。

「女性に手を上げるってなんてことするのよ！最低よ！最低！！」

「はあ？誰だてめえ。俺たちが何しようがいいだろうがよ」

「つてえな！何しやがんだこのアマ！」

「良い訳けないでしょ！子供いじめて、弱いもの傷つけて何が楽しいのよ！このクズども！！」

「あんだとてめえ！！俺たちを誰だと思ってんだ！」

「ただのチンピラでしょ！」

「はっ！俺たちのことを知らねえってことは、旅人かなんかか？今交易がストップしてるのによくやってこれたものだ。まあいい。なら教えといてやる。この街は俺たちのものなんだよ。だから俺たちが何しように構わねえんだよ」

「あんだ達のもの？この街が？」

「そうだ。言つとくが、俺たちに手を出したこと後悔するぜ。なんてったって俺たちは・・・」

「おい、何をしているおまえら」

チンピラが何かを言おうとした矢先、その後ろから目つきの悪く、黒のロングヘアーで黒のマントを羽織った不細工な男が割って入ってきた。

「あ、兄貴！」

「どうした？何か問題ごとか？」

「いえ、この女が俺たちに喧嘩を吹っかけてきやがりました」「ほほう」

若干気障っぽい感じのしゃべり方をしたその不細工な男は、楓の方を見る。楓はその姿に噴出しそうになった。格好としゃべり方と顔が全然合っていない。

「ぶっ！・・・」

「ふふ〜ん。俺様たちに刃向かおうとする愚かな輩がまだいたとはな・・・。身の程知らずとはこのことよ」

楓は、格好つけた感じのこの男のしゃべり方と態度に壺に嵌り、どンドン笑いがこみ上げてくる。

「くくくくく・・・」

「へへ〜ん。兄貴が出てきたらもうお前らデス確定だぜ！今更謝ったって許さねえからな」

楓に蹴られた男が、その男の影に隠れつつ氣勢を張っている。

「兄貴、こいつ俺たちのこと知らねえらしいんです。ちよいと痛い目あわせると一緒に教えてやりましょう！」

「そうだなあ。久しぶりに俺の剣の錆になってもらおうか。この黒剣のな」

そう言っつて、不細工な男は鞘から黒い色をしたロングソードを抜いた。楓は笑いをこらえながら身構える。ふつくんも四肢を踏ん張って臨戦態勢に入る。そのとき後ろから声が聞こえた。

「お嬢さん！あたしたちのことは良いから逃げなさい！こいつらを相手にしては駄目よ！」

「大丈夫ですよ！こんな奴ら直ぐに片付けてあげますから。ね？ふつくん」

「はいでしゅ！」

「駄目、危険よ！勝てるはずないわ！だってこの人は・・・あの漆黒の疾風だもの！」

「はっ？」

「へっでしゅ？」

母親の言葉を聞いて楓とふつくんは素っ頓狂な声を上げた。

「こ、この人が漆黒の疾風？」

楓は漆黒の疾風と呼ばれた不細工な男と母親を交互に見る。

「漆黒の疾風って、あの有名な疾風？」

「そう」

「本当と書いてマジ？」

「はい」

「・・・」

楓は硬直した。こいつがそうなら、自分の知っている護は何なんだという疑問が過ぎる。

「はっはっは。恐れおののくのも仕方あるまい。だが、俺様の仲間に手を出したのは少々お痛がすぎるな。悪いがこの幾千もの人間を切り裂き、血を喰らって黒くなった我が剣をお前の血でさらに黒くさせてもらおうか」

「血がこびりついて黒くなったならそれは錆でしゅよ？そこまで黒いと錆付きすぎて強度も落ち切れなくなるから、剣として使い物に

ならないものでしゅ。まさしく刀の錆でしゅね」

「ぷっはっはっはあ！」

似合いもしないのに格好をつけて構えていた漆黒の疾風なる男に
対し、ふつくんが冷静に的確な突込みを入れたため楓は思わずこら
えきれずに笑い出してしまった。

「はー！おつかしー！！」

「ふふふ、笑っていられるのも今のうちだ。直ぐにその顔が恐怖に
歪む」

漆黒の疾風は依然余裕な態度でしれつと格好よさそうな言葉を発
する。それが余計に似合わず楓の笑いは止まらない。

「あははははは！何格好つけてるのよ。そんな饅頭つぶしたよう
な顔で！」

「なっ！兄貴に向かってなんてことを！」

チンピラの取り巻きたちが慌てどよめく。さすがに、気障を装っ
ていた漆黒の疾風も気を悪くしたらしい。

「ほ、ほう。口の減らない小娘が。誰が饅頭つぶしたような顔だっ
て？」

「饅頭つぶしたようなというより、へちやむくれた虫ね。この顔面
ゾウリムシ！」

「……。俺様に向かってよくも。斬る、絶対に斬ってやる！」

「やれるものならやって御覧なさい」

余裕綽々で楓は笑った。正直楓は戦う能力はまだないが、代わり
にふつくんがいてくれることが強気な態度に出させているようだ。

「この漆黒の疾風に逆らって生きていられると思うな！」

それに対し、漆黒の疾風はさつきから剣を構えて何時でも斬りか
かれる状態になっているというのに、一向にそんな気配はない。言
葉だけ偉そうなことを言っている。

「地獄を見せてやる。逆らったことを後悔するほどにな」

「だから、やれるものならやってみなさいよ」

「……。今謝れば助けてやらんこともないぞ？」

「へーん。謝る気はないですよーだ。このカビ生えクラークン！」
「くっ！言わせておけば！」

「あ、兄貴！何ためらってるんですか！？こんな小娘さっさとやっ
ちまいますよ！」

「お嬢さん。これ以上この人たちを怒らせては駄目です！本当に命
が危ないですよ！」

母親は子を抱きかかえながら、必死に楓に逃げるように訴えてい
る。

「大丈夫大丈夫。あんた！あんたがかかってこないって言うなら私
からいくわよ！」

「おっ！おい待て！本当にやる気か？俺様はあの漆黒の疾風だぞ？
やりあつたつてお前に万が一にも勝てる見込みはないんだぞ？」

「そんなのやつてみないとわからないじゃない。さあふっくん！冷
たいのやつちやつて！！！」

「はいでしゅ！」

ふっくんが口を開け冷たいブレスを吹こうとした。しかし、その
ふっくんを抱きかかえる腕があつた。

「ふっくんさん。こんなところで楓さんと何やってるんですかあ？」

「あ、レナスしゃん」

「もう、お二人がいきなりいなくなつたんでえ、心配したじゃない
ですかあ」

「お、こんなところにいたのか」

レナスに引き続き、護、霞がやってくる。

「何してるの楓？」

「お姉さま。ちょっと不埒な輩がいたので成敗しようと思ひまして
「不埒な輩？この人たち？」

霞は、漆黒の疾風の方を見た。楓が事の事情を説明する。

「へー。それは楓、いいことしたわね。こんなか弱い女性と子供を
いじめるなんて人間のクズだわ」

霞はキツ！とチンピラどもを睨み付ける。さすがにその気迫にチ

ンピラともども漆黒の疾風はたじろいだ。

「そうでしょ？しかも、この腐ったミルクみたいな顔をした不細工な男、あの漆黒の疾風だそうですね。」

「・・・は？」

「ですから、あ・の！漆黒の疾風だそうですね。」

「え？でも、だってそれってま・・・。」

「それはびっくりだ！」

霞の言葉を遮り、護が突然大きさに大声を上げた。

「いやー、こんなところである有名な漆黒の疾風に会えるなんて光栄です。」

「む？なんだおまえは？」

「いやいや、うちのお姉ちゃんたちが疾風様に何か粗相をしてしまったように申し訳ありません！」

「ちよつと！護さ・・・。」

「あの、今回は見逃してもらえませんか？僕が憧れてる疾風様の噂では、凄くお心の寛大で器の大きい方と聞き及んでいるのですが」

「ん？おまえ、俺様のファンか？」

「はい！」

「そうか。うむわかった。今日のところはこの子供に免じて引き上げてやるう。小娘、命拾いしたな」

そう言って疾風は剣を鞘に収めると、チンピラどもに声をかけその場を去っていった。

「ちよーつと護さん！何、あんな相手に下手に出てるんですか！あんな奴らぶちのめしちゃえばよかったのに」

「はいはい。揉め事は起こさない起こさない。大体、楓は戦えないでしょ？」

「ふつくんがいたから問題ないですよ」

「はあー、全く」

「でも、護。なんで漆黒の疾風なんて名乗ってる奴がいるのかしらね？」

「さあ、珍しくもないんじゃない？旅先で結構そういう奴ら見てきたし」

「ふーん。有名になると勝手に語る奴も出てくるわけか」

「名乗らしときゃいいんだよ。そんな奴ら。それより大丈夫ですか？」

護は、座り込んでいた親子に声をかけた。

「ありがとうございます」

「レナス、一応治癒魔法かけてあげて」

「はい」

「あの、助けていただいたので一言忠告を」

「ん？」

「あなたたち早くこの街から出て行ったほうがいいですよ」

「何故？」

「あいつらを敵に回したからです。今回は何故か引き上げましたけど、絶対あとであなたたちを惨殺しに来ます。あいつらは、漆黒の疾風はそこまで残忍なんです」

「ふーん。ご忠告どうもありがとうございます。分かりました。用事が済み次第さっさと引き上げますよ。あ、君、飴あるんだけど食べる？」

護は若干まだビクついてべそをかいている女の子に飴を手渡した。女の子は恐る恐る受け取る。

「それでも食べて、元気になろうね。さて、じゃあ、さっさと官長に会いに行つてきますか。怖いお兄さんたちが舞い戻つてこないうちだね」

護は、みんなを促すと再び街を官長のいる家に向かって歩き出した。歩きながら護は霞にこそそと声をかける。

「ねえ、霞。漆黒の疾風のイメージジってあんな感じなの？」

「えー？そんなわけないじゃない」

「いろんな語る奴見てきたけど、あんな不細工な奴だと認識されるとはちよつとシヨックです」

「クスクスクス。そうね。あの人変な顔してたね」

「あー、なんかへこむ」

カクツと肩を落とし、ため息をつくときを取り直して歩みを進めた。

顔面スピロヘーター？（後書き）

あとがきにゆるる〜ん。

お久しぶりです。毎度毎度お付き合いいただきありがとうございますとございませう。

ようやく、更新することが出来ました。最近まとまった時間がなかなか取れなくて、更新ペースが落ちていきます。

しかし、私のモットーは、書きたいときに書きたいことを書くのでその辺ご理解いただいております。おつきあいしていただけると非常に助かります。

さて、今回は楓が結構頑張っていました。近頃の楓さんは暴走キャラが染み付いてきたように思います。作者としては書きやすくしたいんですが。

今後も、霞を慕いつつ暴走の限りを尽くしてくれることを期待したいです。

また、時間が出来次第更新していきたいと思いますので、気まぐれ的に覗いてやってください。

では、またお会いしましょう。

とある昔の話

湖のほとりに赤ん坊を抱いた綺麗な女性が座っている。その女性は赤ん坊を見ながらまるで聖母のような微笑を浮かべ、子守唄を歌っていた。優しく澄んだ歌声。そこに住まう生き物たちすべてがその歌に聞き惚れた。

「あなたが子守唄を歌うなんて思いもしなかったわ」

森の木陰から別の女性が現れ、赤ん坊を抱いていた母親に声を掛ける。緑色をしたロングヘアに亜麻色の瞳、透けるような肌をして、とがった耳が特徴的な女性だ。

「あら、珍しいこともあるものね。招かれざるお客がくるなんて」母親は特に驚くことも無く、その女性の方を見向きもせずと言葉を返した。振り子のように赤ん坊を揺らす。赤ん坊は無邪気に笑った。それを見て母親もまた微笑む。

「招かれざるお客とは失礼ね。友人に向かって」

女性もまた軽く微笑むと、自分を見もしない母親の横に立ち赤ん坊を覗き見る。

「これがあなたの子？」

「私の子供以外に何があるっていうの？」

「クスツ。可愛らしい子じゃない」

「そうでしょ。将来美形になるわ」

「親ばかね」

「あら、私の子供なんだから、美形になるのは当然でしょ？」

「はいはい。そのとおりよ」

呆れたように女性は肩をすくめた。

「それで、何しに来たのノエル？まさか、お祝いに来たとか言わないわよね」

母親はノエルと呼んだ女性の方を一度も見ることもなく、赤ん坊から視線をはずさずに尋ねた。

「友人の子供を見に来たって良いじゃない。それに祝いに来たらいけない？」

「別に悪いとは言わないし祝いに来てくれたって言うのは嬉しいけれど、どうせ別の理由があるんでしょ？」

「ふふ。まあね」

ノエルはまた軽く笑う。若干小悪魔っぽい笑みだった。

「この子、あなたの資質を強く受け継いでるわ。将来、あなた以上に黒く染まる」

「それを言いに来たの？」

「この子は天界の魂を受け継ぎながら、同時に魔を宿した呪われた子」

「人の子供を見た早々呪われた子とは、たいそうな言い分ね」

「成長につれ増幅する魔はこの子をいずれ飲み込む。天の力を宿しつつ魔を持った子に救いはない。何処にも相容れず、天、魔、人に仇なすわ」

「大丈夫よ。私が、いいえ、夫と二人で愛し慈しみ育てて、思いやりの持った子にするから。魔になんか飲まれなくらい強い子にする」

「そんなことでこの子の将来が変わるかしら？」

ノエルは意地悪そうに尋ねた。しかし、母親は自信ありげに返答する。

「変えられるわよ。人は出会いによって愛によって、いくらでも変わるわ。私もそうだもの。愛の力は偉大なんだから」

「ふふ。まあ、そうね」

「だから、大丈夫よ」

「そう、それならこの子の行く末が楽しみだわ。だけど、もしこの子が魔に飲まれ我を失うようなら、私がこの子をもらうわよ」

「大切な子なんだから、あなたになんかあげないわよ」

「どうかしら。成長が楽しみね」

「ええ。私たち夫婦の愛の力をみるといいわ」

「クス。楽しみにしてるわよ」
ノエルはそう言い残すとその場から消えた。赤ん坊はただあどけなく笑っていた。

オフェリア城のバルコニーでロイスとマレルは優雅なお茶のひと時を過ごしていた。

「ローちゃん。まだ紅茶いる？」

「おう！もらうぜ！」

カップに紅茶が注がれ、ロイスはゆっくりと口をつけた。

「マレルンのお茶はおいしいなあ。うーん、綺麗な愛妻と共に過ごす事後のひと時。まさに至福のときだねえ」

「あら、ローちゃんつたら」

相変わらずロイス夫妻は、イチヤイチヤとしながらティータイムをくつろいでいた。そんな折、強い風が吹き抜けていく。

「おっと」

飛びそうになったテーブルの上の紙を押さえつけ、ふとロイスは空を見た。北東の空で少し暗雲を立ち込めている。

「嫌な・・・風が吹いてるな」

「・・・そうね」

同じく北東の空を見上げたマレルが深刻な顔をして返事をした。ロイスもまた眉をひそめて流れる雲を見つめていた。

とある昔の話（後書き）

あとがきだよ。シャー！

今回の話はちよつと設定に肉づけするために書いてみました。

ストーリーの中の序章的な話なので内容も短めです。

最近、まとまった時間なんて取れないので、こつこつと小出しするのでやつとですが、まあ、気長に付き合ってくださいと助かります。人ってなにか支えがないと生きていけないんだなあと思ひますよ。

疲れが取れない日々をすごしてるんで、一度マッサージとか行きたいです。

では、また次回にでも会いましょう。

問題定義その一

「まだ議会の承認は得られんのか！」

「申し訳ありません。このような事例、前例を見ないものですから議会の方も戸惑っているようで……」

「しかし、この問題を何とかしない事にはこの国の経済は悪化していく一方だと言う事くらい奴らだってわかっていているだろうに！」

「で、ですから……」

とある建物の一室。白髪で少し太った恰幅の良い男は、立派な机を叩きながら強い剣幕で言葉を発した。発せられた方はその男と違い神経質そうで、体格もひよろつとしており必死に汗を拭きながら目の前に佇む男をなだめている。寂しくなった頭は、ストレスによるものか。

「とにかく、例の法案が通らんことには彼の要求に答えることも出来ん。要求に答えなければわが国はずつとこのままだ」

恰幅の良い男は、ふうふうと一息つくくと頭を抱えるように椅子に腰掛けた。そのまま椅子を回転させ窓の外を見る。その目は険しくもどこか物憂げな感じだった。

「か、官長。そもそも彼の要求にこたえる必要があるのですか。私は、どうしてもそこが納得できないのですが」

「……ミカエル君。君も知つてのとおり、彼は英雄だ。世界的にもわが国的にも。あの惨状については説明することもあるまい」

「そ、そうですが……。確かにあの惨状に比べれば今の状態はましと言えますが、事態の悪化が変わったただけなように今は思えるのです。それは私だけの考えではなく、議会においても多数受け取られていることです。ですから、なかなか可決されるはずにいるのであります。第一民主主義を取っているわが国が、一個人に」

「わかつている!!!しかし……。だからといってどうしろというのだ?わが国には軍隊が存在しない。あれから自警団の強化を図った

が、独立国とはいえ微妙な位置に居る我らが他国と対等に渡り合えるほどの力を持つことは、世界のミリタリーバランスを刺激し崩しかねない。最悪連合そのものを敵に回す可能性だってあるのだぞ。だからこそ、今は彼に頼るしかないのだ」

「・・・」

ミカエルと呼ばれた男は、官長の言葉を聞き返す言葉を失った。現在の世界情勢、自国の立場、そういった政治的見解を見たとき力の無い自分たちの状態は痛いほど解っていたからだ。

オルビスは、島国ながらもその交易で経済大国にのし上がった。世界でも非情に数少ない人権平等を主とする稀な民主国家であることで、他国で差別や迫害を受けていた人々や難民が期待と希望をもち多く訪れ定住する。豊富な財を生かし社会福祉や行政サービスも他国に比類なく充実している。まさに民からは住み易いパラダイスと言えたかもしれない。

しかし、それゆえに立場上危険が多く微妙な状態でもあった。世界のほとんどは貴族制をとった国々。貴族はプライドが高く、ただか平民が国を持ちしかも自分たちよりも金を持っているということとを良く思わない連中が居る。今、国同士の戦争は落ち着いたものの、戦時中はこの国の財を狙って戦争をしかけようとする国は多数あったのだ。それは今でも事実上変わっていない。その危ない立場から守って来たのは全て、皮肉にも戦争の火種となるお金であった。有数の大国に大金を支払う事で、身の安全を保障してきてもらっていたのである。

そのため、下手に軍隊を持ち力をつけると今まで守ることで大金を得ていた大国との立場が危うくなる可能性とこの国を狙っている他国を無駄に刺激し戦争の口実をみすみす作る結果にもなりえない。

それはあくまで外交上の問題だが、そういう事情から自国内での有事に対してはすこぶる弱いという弱点があったのだ。それを痛感させられたある事件が過去に起きている。

「・・・問題なのは、彼、なのだ。彼さえなんとかできれば・・・」
「・・・官長」

ミカエルは、少し声のトーンを落とし慎重な面持ちで言葉を向けた。

「なんだ？」

「この際・・・彼を排除すると言っつのはいかがでしょう？」

「排除とは？」

「ですから・・・抹殺・・・という事も」

「おまえは阿呆か」

このミカエルの発言に呆れたように官長は答えた。

「わが国は平和主義に則った民主主義国家だぞ？私はその頂点に居る」

「それは承知の上です。しかし政治問題は今は棚上げすべきでは？」

「そういう事を言いたいわけではない。現状でその案をどうやって実行に移すと言っつのだ？」

「誰か、わが国で腕利きを探して・・・」

「阿呆。彼に勝てるほどの腕利きなどわが国に居るか。居たらあの時既に問題は解決していた」

「で、では他国からの旅人か誰かを雇うか、他国に応援を呼ぶと言っつのは・・・」

「船の出入りが禁止になっている現状で・・・か？」

「・・・」

ミカエルはまた黙ってしまった。島国であるオルビスは、他国との交流は船と言っつ手段しかない。しかし今はその唯一の交通手段である船を押さえられてしまっつている。

「で、ではどうすれば・・・」

「だーから！先ほどから頭を悩ませていると言っつているのだろう！とにかく、今は議会で法案が通っつてくれる事を優先事項として処理してくれたまえ」

「は、はい！」

ミカエルは頭を深々と下げると部屋を出て行った。官長は再び窓の外を見る。

「彼に敵う相手など、居るのか？やれやれ、悪事が悪事を呼んだか・
・・」

ポツリと呟いた言葉が、むなしく虚空を舞っていった。

問題定義その一（後書き）

あとがきです。

お久しぶりです。本当久しぶりにパソコンの前に長々と座ることが出来ました。

只今私、ある事と格闘中なもので（汗

しかし、なかなか先に進みませんね。あれやこれやと考えてはいるのですが、昔ほどの集中力がなく、これくらいの文字量でダウンですよ。

また、ぼちぼちと思い出したように更新していきますので、よろしくお願いします。

そういつこともあるさね」

「どうしてこうなるんですか!!」

薄暗く、じめついたある建物の小さな一室。隙間無く積み上げられたレンガの壁は、中にいるものを押しつぶしてしまいそうな圧迫感を感じさせる。そのせいか、少し息苦しくもある。そんな居心地がすこぶる悪い部屋の中から響く楓の怒鳴り声は、反響しながらむなしく空中に霧散していった。

「そんなに大声出さなくてもいいじゃん」

「出したくもありませんよ!!なんで私たちがこんなところに入らなきゃならないんですか!!」

護のひょうひょうとした態度にさもイラついたように、楓はさらに声を荒らげた。護は顔をしかめながら指で耳を塞ぐ。向かいに座っていたレナスはそんな護を見てクスクスと笑っていた。ふつくんはレナスの膝の上で行儀良く座りながら真ん丸な瞳を楓に向け、霞は立った姿勢で壁にもたれかかり腕を組んで目を瞑っている。

この中で一番騒いでいるのは明らかに楓だった。

「ちよつと誰かーっ!!!!私たち何もしてないじゃないですかあー

ー!!!」

「うるさいぞ!黙れ!!」

唯一圧迫感の無い開けた廊下側、その廊下に立っていた兵士とも思いき男が楓に向かって怒鳴り返す。威圧感を与えるかのように、廊下と部屋を隔てた鉄格子を短槍でぶつたたたきながら。

「ううう。私たち本当悪くないんですよあう・・・」

完全に威圧された楓は声をしぼめ、鉄格子を握りながらその場に力なく座り込む。

「まあまあ〜楓さん。そんなに落ち込まないで。入っちゃった以上しょうがないじゃないですかあ」

「そうそう。そのうち調書かなんか取られると思うから、そのとき

に弁明すればいいんだって。今ここで騒いだって印象悪くするだけだよ」

相も変わらずおっとりとした口調のレナスに、護も相槌を入れる。そんな二人を若干涙目になっている楓はじとーっと視線を送った。

「クスン。私、牢屋に入れられたの生まれて初めてですよおう」

「いや、普通大抵の人がそうだから。僕だって・・・あー」

楓に的確な突込みを入れた護だったが、言葉の途中で口を塞ぐ。

そういえば、自分は牢屋に入るのは初めてではない。実は何度か過去に経験している。

ここは、オルビス民主議事堂の地下に設けられた留置場。護たちは今、留置場の中の牢屋の一室に閉じ込められている。

「うん。まあ、生きていればこういうこともあるさ。将来良き思い出として残るよ！はっはっは」

「普通こういうこともないですし、悪き思い出ですよ！あー、私のヴィクトリーロードに傷が・・・。なんでこんなことにい〜」

楓は頭を抱えて天を仰いだ。

何故こうなってしまったか。護たちがこの牢屋に入る前に、時間は少し遡る。

「護、ここ？自治官長がいるの？」

「うん。ここはオルビスの議事堂。議会が討論して政策を決める場所。この中に自治官長室兼邸宅が設けられているわけ」

護たちパーティは、オルビスの行政を司る民衆議事堂なところをやってきた。建物自体は特に変わっているわけでもなく、ただ白く四角いだけだ。目的はもちろん自治官長に会うためである。

「さてさて、時間ももつたないし、さっさと会いに行きますか」

そうして、中に入って行く。建物中に入ってみると、入り口内部は天井がやたら高かった。見上げるとまるで吸い込まれそうな錯覚を感じさせる。天井には色鮮やかな綺麗なガラス絵が描かれていた。空を指差し反対の手で書物を抱えている凛々しい男性像だ。入って

すぐ正面に受付と書かれたスペースがあり、眼鏡を掛けた女性が座っている。他のメンバーが頭上を見つめる中、護は一人その受付へと歩みを運ばせた。

「こんにちは」

「こんにちは。小さな来訪者さん。今日はなんの用でいらしたのかな？」

護の挨拶に、にっこりと微笑みながらその女性は柔らかに尋ねる。

「あ、えーっと。自治官長さんにお会いしたいんですけど」

「官長？ 申し訳ないけど、只今議会での質疑応答中なの。会うとなると、それが終わってからになるかしら？ その後のスケジュール次第だと思うけど。うーん。ちょっと待ってね」

そう言って受付の女性は、手元にあつた書類ファイルを手に取りペラペラめくり始める。何枚目かで手が止まると、それを見ながら声を出した。

「あら、ごめんなさい。官長のスケジュールだとしばらく空く時間は無いわね」

「そうですか。会えるとしたらいつになります？」

「うーん、そうねえ。運がよければ来週・・・いえ、再来週かしら」「そんなに待たなくちゃならないんですか？」

「ええ。今、何か問題を抱えてるみたいで。ここしばらくずっと多忙なのよ。それが解決するまでお時間は取れないんじゃないかしら」「んんん、困ったなあ」

護は、頬をかいた。何か問題があつたとき頬をかくのは、昔からの癖である。護が真剣に悩んでいると、その姿を見た受付の女性が不思議そうに尋ねてきた。

「そんなに急に会わなくちゃならないことかしら？」

「え？ ええ、まあ。僕らとしては早めに会いたいですよ。えっと、実はこちらの勝手な事情なんですけど、そちらで抱えている問題を解決しなきゃならなくて」

「問題を解決？ 何の問題のこと？」

「あの、今この国の交易をストップさせているっていう問題を・・・」
それを聞いて女性の表情が少し固まった。そして、慌てたかのように急に辺りを見渡すともう一度護の方を向く。人差し指を立てて口に当て小声で話し出した。

「シー！駄目よ、坊や。めったにそのことを口にしたら。何処で誰が聞いているか分からないんだから」

「あ、すみません」

護も思わず小声になる。

「でも、どうして口にしたら駄目なんですか？」

「今、そのことでも議会で揉めてるらしいんだけど、ちよつとある人が絡んでるらしくてね。そのある人の耳に議員以外の人、ううん、議員でも場合によっては危ないんだけど、その話題が入るとまづいのよ」

「どうまずいんですか？」

「危ないって事。まあ、小さい子には分からないことかもしれないけど」

「はあ。・・・とにかく、その件について官長にどうしても話があるんです。なんとか会えないでしょうか？」

「そうねえ・・・」

女性は何かを考えるかのように上を見ると、しばらくして立ち上がり受付から出てきた。

「ちよつと待っていてくれるかしら？私じゃどうしようもないから、もっと上の人に聞いてきてあげるから」

「すみません」

女性はにっこりと微笑むとその場を立ち去っていった。入れ替わりに霞たちが護のもとにやってくる。

「どうなったの、護？」

「官長とか言う人には会えそうですか？」

「・・・たぶん」

護は、また頬をかいた。

数分後。受付の女性とやってきたのは、小柄でひよろつとした体格の中年を少し過ぎた男性だった。頭が薄いのが特徴的である。

「官長に会いたいというのは君たちかい？」

「はい、えーっと」

「この方は、官長の私設秘書のミカエルさんよ」

「どうもはじめまして、ミカエルさん。風神護と言います。こちらが、あー・・・姉たちで。一番上の姉レナスと、順に霞、楓です。

この子はふっくんです」

「はじめまして」

「どうも」

ミカエルはにこやかに他の三人とも握手をする。

「で、あー、今官長は手が放せない状態なので代わりに私が話を聞きにきたのだが・・・」

ミカエルは、霞、楓、レナスの顔見比べる。誰に話を聞けばいいのか迷っているのだ。どうやら子供姿の護は、鼻から会話の対象外らしい。当然ふっくんもだ。

「あの、話は僕がします」

「うん？君がかね？・・・んー、まあいい。それで、話と言うのは確か国が決定する公式の今年の流行語についてで合ってるかね」

この言葉に霞と楓は顔を見合わせた。ミカエルは違ったかな？といった感じに眉を上げる。

「え？あ、あの、私たちは」

違うと言おうとした楓を護が手で制した。続けてにこやかに笑みを作りながら護が言葉を発する。

「はい。その件です。実は、その件で今年の流行語にく〜ですにやー>が対象外になるという話が聞きました。巷で大ブームなのに何故対象外なのかと異議申し立てを受けまして、そちらの問題定義と解決案を模索しようと私たち近代言語研究会が代表してやってきた

んです」

「なるほど、そうだったか。その件については、こちら議会でも揉めていてね。なかなか結論が出ないのだよ。ちょうど民間の意見を聞きたいと思っていたところだ。こちらで詳しい話を聞こう。ついてきたまえ」

ミカエルは踵を返すと、歩き出した。護は受付の女性に挨拶すると、その後をついていく。霞たちも良く分からないと言った表情を浮かべながらも後に従っていった。

通されたのは廊下突き当たりの一番奥まった部屋だ。

「まあ、掛け給え」

ミカエルに促され、護たちは椅子に腰掛ける。霞と楓は戸惑いながら腰掛るが、護、レナス、ふつくんは何事も無いかのようにありがとうございますと言いながら平然と腰掛けた。

ミカエルも向かい合って座り、徐に話し始める。

「いやー、普通こうやって突然やってきた方と話すことはないんだよ。本来ならきちんとした請求手続きを行ったうえでその代表者の人とそういう場を設けて話すんだけどね。こういうことは」

「それは重々承知の上です。突然の訪問にも答えていただきありがとうございます」

護は深々と頭を下げた。

「いや、別にお礼はいい。実際官長とは会っているわけではないし、私はいわば代理にしか過ぎないからね。まあ、しかしせっかくやってきた方を頭ごなしに帰すのも気が悪いものでね。話くらいは聞こうと言う事にしたのだよ。それでだ。前置きはさておき、その流行語の決定の話についてだが・・・」

「ええ」

「その前にいくつか聴いておきたい事があるのだがね。いいかな？」

「はい」

「君たちは、ここの議員関係者かね？」

「いいえ」

「ふむ。では、この国の住民かね？」

「いいえ」

「・・・そうか。では、その話を何処で聞いたのかな？」

「テリシャで交易関係のとある人物に聞きました」

「ふむ」

そこまで聞いてミカエルはしばし沈黙する。護も何もしゃべらずミカエルの言葉を待った。楓はなにやら横の方で霞と大丈夫ですかねなどと小声で話をしている。

考え込んでいたようだったミカエルはもう一度護を見て、口を開いた。

「この話は、あー、流行語の話は、本来国民が知っているはずが無情報なのだよ。議会ではもちろん論議されているが、一般には公にされていない話なわけだ。まだ何一つ決まっていない状態だからね。いや、知っていたとしても国民はそのことについて行政に意見を言いに行くことはない。だから、その話を聞いたとき、もしやとは思ったのだが、そうか・・・やはり国外の人間か」

「ええ。ある目的のために旅をしています。どうしても北の大陸に行かなければならなくて、ルートはこの国にしかありませんから」
「なるほど。そちらの事情はあらかた分かった。その話を持ってきた理由も」

「察していただいて助かります。それで、どうでしょう？」

「待ちたまえ。あと、二点聴いておきたい」

「为什么呢？」

「一つは、その話について君は解決策を話し合いたいと言っていたね？という事は、君の方では解決策は一応用意できていると捕らえていいのかな？」

「はい。状況にもよりけりですが、僕が思っているとおりにあります」

「ふむ。では、もうひとつ。君たちが居ると言うことは、船でやってきたということだろう？あるいは飛行魔法か何かで？」

「はい。船でやってきました」

「交易が止まっているのに船でやってきたということは、個人の船だね？」

「ええ。まあ。その話を教えてくれた人の船ですが」

「この国に入るに当たって、正規の入国手続きを踏んだかね？」

「・・・いえ」

「では、不法入国ということだね」

「・・・はい」

「そうか・・・」

ミカエルはまた沈黙した。何かを考えるかのように顎を撫でている。

「わかった。ちよつと待っていていなさい」

そういうとミカエルは立ち上がり部屋を出て行った。

「ちよ、ちよつと護さん。何わけの分らないことしゃべってたんですか？流行語ってなんです？私たちは交易の・・・」

楓の責め立てる口をレナスが横から手で押さえつけた。

「もごぶごもぐっ！！」

「まあまあ、楓さん。そんなに責めなくてもいいじゃないですか」
につこりおつとりと微笑みつつもレナスはがっちりと楓の口を押さえている。楓はその力に勝てず振りほどけなかった。しばらくもごもご言っていたが、疲れたのかあきらめたのか急に静かになる。

そうこうしているうちに部屋の扉が空き、ミカエルと何人かの屈強そうな男たちが入ってきた。

「この者たちを不法入国犯罪者として、逮捕しろ」

「はっ！わかりました」

「え？え？」

楓は慌てふためく。

「君たちは留置場行きだ」

「なんでー！？」

楓の叫びもむなしく、そうして、護たちは縄を掛けられ留置場へ

と送られたのであった。

そういつこともあるさね〜（後書き）

あとがきですにゃー。

お久しぶりです。資格試験と格闘してようやくひと段落終えた不肖な作者です。

絶対受かるつもりで勉強してたんですが、なかなか難しい結果になりそうです。

さて、オルビスに到着した護たち一行ですが、前回からどうも議会議事だのなんだのと政治っぽいような話でファンタジーの欠片も見当たりませんが、一応ファンタジー小説です（笑）

近頃、空想力が落ちて現実に染まってきているので、こんな感じの話に触れてみましたが、次回、次々回あたりでまたファンタジー要素を注入できればいいなと思ってます。

毎度毎度拙い小説にお付き合いいただきありがとうございます。
では、また〜

真意

牢屋の中は、護たち意外誰も入っておらず冷たく薄暗い。明かりは各部屋の廊下側に一つずつ、蠟燭の火がぼんやりと照らしているだけ。その雰囲気だけで体感温度はかなり低く感じられる。そのジメジメとした嫌な空気を破るかのように場違いな叫び声をあげていた楓は、今は静かに霞の隣で座っている。

ただ、座りつつもブツブツと文句は言っているようだ。ふっくんはそんな楓の手を励ますように舐めている。

牢屋に入れられて三時間ほど経っただろうか。いや、まだ一時間しか経っていないかもしれない。圧迫された空間が時間の感覚を狂わせる。

長く息苦しい時間。しかし、それでも楓以外皆ひどく落ち着いていた。レナスや護は過去の戦場の経験により、霞は護が傍にいないことにより、ふっくんはどうやら生来的にこういう場でも平常でいられた。

ただ、至って普通の生活を過ごし、極々普通の女の子として育ってきた楓はこの状態が辛いらしくだんだんと鬱々としていつている。もともとの性格も災いしているのかもしれないが。

護「あれ〜?」

ひっそりと佇む静寂の中、護の間の抜けた声が響く。

霞「どうしたの、護?」

護「いや〜、おかしいなあと思って」

霞「何がおかしいの?」

護「なんで僕たちまだ牢屋にいるんだろう?」

霞「は?」

楓「護さん!それは、私が聞きたいですよ!!何呆けてるんですか!?!大体護さんが・・・!!」

護ののほほんとした発言にカチンと来た楓は、捲くし立てる様

に声を荒らげる。それを、霞は手で制した。

霞「どういうこと?」

護「えーっと、つまり牢屋に入れられてどれだけ時間が経ったかは分からないんだけど、そろそろ何かアクションがあるはずなんだけどなあってこと」

霞「アクションって?」

レナス「取調べとかのことですよ〜。拷問とかあ」

レナスはおっとりとした口調のまま、笑顔を絶やさず怖いことを平然と言つてのける。楓はおもわず霞に抱きついた。

護「まあ、普通はそうなんだけど。今回は……。あれ?読み間違えたかなあ?それとも、伝わらなかつたとか……。いやいやあの人はそんなはず」

護は独り言のように呟きながら首をかしげた。その発言の意図が分からず、他の者たちも同じく首をかしげる。

そんな中、廊下の突き当たりにある扉がギシギシッと音を立ててゆっくりと開かれた。

護「ん?」

鉄格子から覗き見るようにそちらを見る。その視線の先にはミカエルがいた。ミカエルは挨拶する守衛に手で返事すると、ゆっくりとこちらに向かつてくる。

護「あ、来た来た」

楓「ごーごーもんですか?!?ごーもんされちゃうんですかあー!?!」

霞「楓……。痛いわ」

楓は霞の腕をギュッと掴んで離さない。

ミカエルは、護たちの部屋の前に来ると黙って鍵を開ける。

ミカエル「出なさい」

護「じゃ、遠慮なく」

レナス「ふつくんさん、行きましようかあ。ほら〜、霞さんたちもお」

楓「だ、駄目ですよー！鞭で叩かれて爪むかれて水攻めされて吊るされて・・・キャーキャーイヤーッ！！」

霞「楓・・・五月蠅いわ」

泣き叫ぶ楓を尻目に霞も牢屋を出る。

ミカエル「ついてきなさい」

ミカエルに促され、護達はその後を歩いていく。一人残された楓は慌てて牢屋を出ると、霞の後ろにぴったりとくっつきながら涙目でついていった。

牢獄を出てミカエルが進んだ先は、最初に通された部屋だった。

最初と同じように中に通され、同じように皆座る。ミカエルも同じように間迎えに座った。

ミカエル「いやー、すまないねえ。思った以上に手続きに手間取ってしまつて」

開口一番、ミカエルは護たちにすまなさそうに謝った。護は、「いえいえ」とにこりと微笑みながら手を振る。楓は突然の状態の変化に対応できず何がなんだかというような顔でミカエルを見ていた。その視線に気づいたミカエルは改めて説明を始める。

ミカエル「君たちは、不法入国者だからね。一応立场上留置する必要があるのだよ。交通が成り立っているときならまだ穩便にといとくところなのだが、例の件によつて今は他の国との交通自体禁止されているからね。変にあの者に勘繰られたくもなかったし、悪いけど牢屋に入ってもらつていたわけだ。その間に、極秘裏に入国手続きは取つていたのだが、それが思ったよりも時間が掛かつてしまつてね。いやはや、申し訳ない」

ミカエルは、神経質そうにハンカチで額の汗を拭く。

楓「じゃあ、拷問とかは・・・」

ミカエル「拷問？ああ、しないしない。するわけがない。そもそもわが国は民主主義だからね。拷問という人権を無視した行為は、最初から禁じられているのだよ」

楓「あー、そうなんですか。良かったー。私、どうなるかと・・・」
楓は心底ホツとしたようにため息をつく。

ミカエル「さて、説明はさておき、例の件についてなのだが」

護「ええ」

ミカエル「その前に、一つ聞いておきたいのだが、いいかね？」

護「はい」

ミカエル「君は、風神君と言ったね。君、ご兄弟か誰がいるかね？」

護「・・・いませんか？」

ミカエル「あ、そうか。ならいいんだが。いや、風神とはまた珍しい名前だからね。もしか、以前この国に訪れた青年の親類かと思っただよ」

護「あ、それ僕です。覚えてらしたんですか」

ミカエル「ん？僕って・・・でも背が・・・縮んだのかね？」

護「仕様です」

ミカエル「そ、そうか。それも魔法の一種かね？いやあ、魔法と言うのは凄いものだねえ。私も若返ることが出来れば・・・」

ミカエルは少し遠い目をしながら頭をさする。

ミカエル「いや、それなら納得だ。通りで隠語会話が成立するわけだ」

護「ええ。まさか今でも使われているとは思いませんでしたよ」

ミカエル「うむ。あのときのことを参考にしてな。今でも上層部では使っているよ」

霞「護。ミカエルさんとはお知り合いだったの？」

護「ううん。知り合いってわけじゃないよ。ただ依然来たときお世話になった方のお知り合いだったみたい」

ミカエル「うむ。私は直に話すのは初めてだ」

霞「そう・・・ですか」

護が以前来たときって何があったんだろう、と霞は気になったが今は聞かないことにした。そんなことよりも今は片付けなければならぬことがある。そのうち機会があれば護の口から語ってくれる

かもしれない。

護「それで、本題ですが。ああ、えっと・・・」

護は、尋ねておきながら口籠った。わざわざ隠語を使ってまでの会話、牢屋入り。ミカエル側としては相当気を配っていることだ。それなのに前準備もなくいきなり本題を突くというのは、いかがなものか。

口籠って会話に困っている護を見て、ミカエルは察したようだ。

ミカエル「護君、大丈夫だ。君たちが牢屋に入ってもらっている間、手続きと共にこの部屋のセキュリティレベルを上げておいたからね。盗聴盗視の類の心配はない」

護「それは何より。では、改めてこの国に何があったのか教えてもらえますか？」

ミカエル「うむ。あれは・・・」

そうして、ミカエルは事件のことを話し始めた。

真意（後書き）

ご無沙汰しております。

物を書くというのがこんなにも大変だったのかと最近になって痛感しますね（汗）

今回分かりやすくなるかな？と試験的に各台詞の前にしゃべっているキャラの名称を入れたんですが、いかがなものでしょうか？
しばらくこの形式でいこうかと考えています。

今年も資格試験との戦いで、かなりアップに時間が掛かっています
が気長に見てくれると助かります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8282f/>

風の名のもとに・M

2010年10月8日13時13分発行